

第 1 1 回全国水の郷サミット 報告書



開 催 日 : 2005 (H17) 年 10 月 26 日 (水)

開催場所 : 国土交通省 講堂

主 催 : 日野市・国土交通省

はじめに

「水の郷百選」は、水を活かした地域づくりに資するため、地域固有の水をめぐる歴史や生活文化を維持・発展させるとともに、優れた水環境の保全に努め、水を活かした地域づくりに優れた成果をあげている市町村を1995(H7)～96(H8)年に旧国土庁が認定したものです。

1995(H7)年の認定以来、「全国水の郷サミット」が毎年開催され、水の郷や水文化の普及やPR、水の郷市町村の情報発信等の面で大きな役割を果たしてきました。しかし、過去10回の開催を数える中で、サミットの内容がパターン化してきたことは否めず、新たな展開に踏み出すことが必要となっておりました。

このようなことから、11回目の開催となる本年(2005年)のサミットでは、一般の方々を対象としたイベント中心のこれまでのサミットの内容の見直しを行い、「今後の水の郷の地域づくりの展望」というテーマの下、水の郷市町村の今後の行政運営に資することを目的に、市町村で地域づくりに取り組んでおられる関係者を対象に実践的な講演等を中心とした内容で開催しました。

本報告書は、当日の講演や事例報告・パネルディスカッションの内容の記録のほか、当日の配付資料を盛り込んだものです。水の郷市町村に広く存する「水」及びその源である「森林」を活かした今後の地域づくりにご活用頂ければ幸いです。

第 1 1 回全国水の郷サミット プログラム

テーマ「今後の水の郷の地域づくりの展望」

日 時：2005 (H17) 年 10 月 26 日 (水) 13 時～18 時

場 所：国土交通省講堂 (合同庁舎 2 号館地下 2 階)

12:30— 受付

13:00—13:10 開会挨拶
日野市 馬場弘融 市長

13:10—14:10 講演
「自立の村づくり」
下條村 伊藤喜平 村長

(休憩)

14:20—15:00 事例紹介 1
「地下資源の枯渇後にも持続的に自立し得る地域づくり」
名古屋大学 高野雅夫 助教授

15:05—15:25 事例紹介 2
「都市における水辺の保全・再生と地域活性化」
日野市 小笠俊樹 課長補佐

15:30—16:10 事例紹介 3
「地域資源を活かした活性化方策」
東京大学 堀 繁 教授

(休憩)

16:30—17:50 パネルディスカッション
ーコスト縮減下における水の郷の地域づくりの展望ー
コーディネーター：堀 繁 東京大学教授
パネリスト：伊藤喜平 下條村長
馬場弘融 日野市長
高野雅夫 名古屋大学助教授
仁井正夫 国土交通省水資源部長

17:50—18:00 閉会挨拶
水資源部 仁井正夫 部長

18:15— 交流会

開会あいさつ

日野市長 馬場弘融

みなさん、こんにちは。ご紹介を賜りました日野市長の馬場でございます。全国水の郷サミットの開催にあたりまして、一言ご挨拶を申し上げたいと思います。

水の郷に認定されております市町村の皆様方におかれましては、新年度への予算組みに加え、国勢調査への対応、あるいは合併等に係る業務など、大変ご多忙の折とは存じますが、本サミットに多数の皆様方のご参加をいただきまして大変ありがとうございます。また、本日は、都道府県・関係機関・団体の皆様方からのご参加を頂いていると伺っているところです。重ねて御礼を申し上げます。

今回、東京都での開催ということでございますが、東京の水辺と言えば隅田川あるいは多摩川が非常に特徴的であると思います。私どもの日野市は多摩川に面しており、古くから多摩川の恵みを受けて今の町があると考えております。そういう意味で、今日は職員ともども、皆様とさまざまなご発言のなかで勉強させていただきたいと思っております。

さて、今回で11回目の開催となります全国水の郷サミットであります。1995(H7)年3月に水の郷が最初に認定されてから10年目という節目を迎えたわけであります。これを踏まえまして、これまでのサミットとは異なる新たな形を目指して、昨年来、本サミットの準備を進めてきたところでございます。

まず、サミットの対象者につきましては、目的の絞り込みあるいは具体化を図るという観点から、水の郷認定市町村の職員を主に念頭において開催をするという形にさせていただきました。また、内容につきましては、水の郷市町村に広くある水、そして、その源である森林を活かした地域づくりを、昨今の国や地方の厳しい財政状況のなかで、どのように展望していくかというものにさせて頂きました。

具体的には、長野県下條村の伊藤村長から、役場職員の削減や建設資材支給事業の実施などの意欲的な取組についてのご講演をいただきます。また、無駄なお金をかけない形での温泉町の活性化の事例報告もプログラムの中に入れさせて頂いたほか、日野市の取組も紹介をさせていただく予定にしております。

本日の議論を水の郷認定市町村における今後の地域づくり、政策づくり、あるいは市政運営の場に活かしていただければ大変ありがたいと思うところでございます。

結びになりますが、本サミットの開催にあたりまして、格別のご配慮、ご支援を賜りました国土交通省の関係者を始めとする多くの皆様方に重ねて深く感謝を申し上げまして、冒頭のご挨拶とさせていただきます。

ありがとうございました。

自立の村づくり

長野県下條村長 伊藤喜平

1. はじめに

ご紹介頂きました長野県下條村の伊藤でございます。何か一言しゃべってくれというお話が国交省からあり、軽い気持ちでお引き受けした訳でございますが、田舎村長が急にいい格好したって無理ですので、田舎村長丸出しでやれば良いではないかと、意を決してここに参ったところでございます。

2. 下條村の概要

「下條村の行財政改革」と書かれた資料(12 ページ～)でございますけれども、私は、「行財政改革」という言葉はどうもしっくり来ておりません。今の小さな町村では、財政を健全化した後に行政をどうするか考えるという逆の発想でなければ、行政が前面に出て、積み重ねの理論でいたずらに肥大化してしまい、ややもするとコスト意識が希薄となり、につきもさっちもいかなくなる傾向がありますので、私はできるだけ「財政改革」を前面に出しております。

さて、村の沿革でございますが、明治 22 年(1889 年)に合併し、今日まで 116 年間、単独村を維持しております。位置は、長野県の南端にありまして、ちょっと行くと愛知県・岐阜県・静岡県に面しております。全体の面積は 37 平方 km、山林面積は 69.4%でございますが、周辺の村ですと 98%にも達している村もあります。また、この地域には人口 800 人以下の村が 5 つあります。4,200 人の下條村は小さな村と思われるかもしれませんが、この地域では中核的な村ということになります。

金もない村ですけれども、今になってみますと、今日まで存続できたのは、何もなかったからかえって良かったのではないかと感じております。何もなかったのですが、私が村長に就任した平成 4 年(1992 年)から、全村民に危機感だけはしっかり抱いてもらうように心がけて来ました。

また、昭和 36-37 年(1961-62 年)の昭和の大合併の際、下條村は合併しないということで、議会も解散し、村長も辞任するなど、村中が相当紛糾したそうでございますが、これ以来、今日まで単独を保つことができたのは、本当の意味で適正規模で皆がまとまりを持ってきたということが良かったのかなあと感じております。

去年(2004 年)の 2 月、合併に Yes か No の意向調査を実施しました。「わからない」という回答が 20 数%ございましたが、残りを Yes か No で分けてみますと、5%が合併を考え

たらどうかという回答でしたが、あと 95%は今のまま単独で行きましょうという答えでした。

人口は、わずかずつですが、増えております。18 町村で構成している下伊那郡町村のうち、人口が増えているのは2つだけで、残りの町村は人口が減っております。下條村の人口は、放っておけば、グラフ(資料1ページ下)のだんだん下がっている▲の部分のような数字になったわけですが、おかげさまで4,200人を若干オーバーしたところです。35年ぶりに4,200人の大台を突破したということで、田舎の大きな話題となっております。

2ページの年齢3区分ですが、0～14歳が17.3%ということで、長野県で一番高い数字でございます。だいぶ若返ってきたと思っております。ただし、65歳以上の高齢化率が28.3%でございます。ちなみに、私どもの横の横の天龍村の高齢化率は48.5%でございます。今年は必ず50%にいくであろうと見込まれております。

保育園・小学校・中学校はそれぞれ一つでして、役場を中心に車でだいたい8分か9分くらいの半径の中に居住ゾーンがあります。そういう意味では、行政効率が良いと思っております。

3. 村長就任まで

私の生い立ちでございますけれども、私は、田舎で中小企業の経営者をやっておりました。昭和40年代後半(1970年)から50年(1975年)にかけて、人が特に減っていききました。「もう少し行政は活性化対策をしてくれなきゃ駄目じゃないか」ということを役場に掛け合っただのですが、当時の役場なんてものは、産業活性化なんてことは我々がやるべきものではない、役場がやることは、国で言われたこと、県から言われたことを、ゆっくりと、しっかりと、焦らず、たゆまずやるというムードでございました。人が減るということは、経営者にとっては、ユーザーも又優秀な人材も失うということで、正に致命傷です。

そこで、「このムードだけは変えなければいけない」ということで、議会の方に出させて頂きました。3期ほどやらせてもらったんですけれども、当時は、農業なりで功なり名を遂げて、そろそろ議員でもなるか、というような人が半分くらいおりまして、どうもうまくいかない。議会の限界を感じ議員を退き、平成4年(1992年)に村長に出させていただきますました。

私どもの村は人口4,200人ばかりの村でございますけれども、なぜか政治家が多数出る風土がありまして、現在でも現職の県議会議員が2名出ております。過去には、自由民主党と社会党から2人の下條村出身の国会議員が出ておりました。選挙になると村がまっぴたつになる訳でございます。そういう中で私も、大変な選挙でしたけれども、どうにか当選させていただいておるわけでございます。私は、議会も含めまして、過去7回選挙に出

ておりますけれども、無投票は一度もありません。「あれが出るんなら、こっちで必ず玉をだすぞ」という風土がございまして、これも善し悪しですけども、常に村内に良い意味での緊張感があるというように良く解釈しております。

4. 役場職員の意識改革

村長になって、役場に入って実務をやってみて、予想はしていたものの、改めて愕然といたしました。

ここから先は、地方公務員の皆さんに対しては非常に厳しい言葉が出ると思いますが、私は皆さんではなく、長野県下條村の地方公務員に照準を当てておるわけでございますので、あまり感情を害さないように聞いて頂きたいと思えます。

私は、今日あって明日なき命の中小企業の経営者でした。毎日が真剣勝負でした。そこに働く従業員も真剣勝負でした。その従業員のパワーを10とするならば、私どもの地方公務員の皆さんは4か5くらいのパワーしか出しておりませんでした。もし民間の企業であれば3ヶ月くらいで倒産です。それが当然の事として今日まで来ていました。

これには色々な問題点があります。基本的には旧態依然の公務員組織にあります。コップの中の仲良しクラブ、行政のスピード・効率なんて事の意識は超希薄、前例踏襲、かかっただけが経費であり、そうした環境では、コスト意識・競争原理が全くといって良いくらい機能しない状態でした。トップにも大いに問題ありと考えます。公務員の本質である“全体の奉仕者”の自覚のもしっかり目指すべき方向を定め、全員がその目標に向かって一丸となって進む気概が欠如していたと思えます。

私も、7月に当選してから12月まで、徹底的に注意したりしたのですけれども、50点が65点くらいにはなりましたが、それ以上はどうしても伸びません。前の村長はあまりガミガミ言わなかったのに、何故(伊藤村長は)やることなすこと駄目だ駄目だと言うのかと、不満に思う職員ばかりでした。

これでは駄目だと言うことで、下條村の職員が最も忙しい12月～1月の予算編成の時期、助役以下職員を11～12の組に分けまして、長いのは1週間、短いのは4日間くらい、飯田市のホームセンターに交代で行って全員に物品販売の店頭に立ってもらいました。そこに派遣された職員は、朝から接客態度や商品知識を教えられ、一日終わると、例えばその部所の売上げ目標70万円に対して今日の売上げは55万円しかない、どこに問題があったんだ、その原因は何かと言うようなことを毎日やられるわけでございます。また、お客様に商品を説明して、納得してお金を払ってもらうということが、いかに大変かということが初めてわかったわけでございます。

国や県から来る金を、さも難しげに配る機会が多い職員諸君にとって、晴天のへきれきだったと思えます。いかにして金を稼ぐかということ、この苦しさつらさというのを嫌と

いうほど経験してもらいました。

当時は、この研修に対し、県から私の所に、民間のしかも物品販売会社に職員を研修に出すのは問題ではないかと相当きつい指摘もありました。14年間たってみますと、今、長野県の田中知事は“革命の風雲児”でございますが、ほとんどのめぼしい職員を民間に出してしっかり研修してもらっております。それだけ世の中が変わったのだと思いますし当然だと思っています。

5. 建設資材支給事業

そうするうちに、職員の見つきが変わりました。小さな村ですので、「おい、今までふんぞり返って目の輝きがねえ連中が、頑張り始めたぞ」ということになる、行政に対する村民の見つきも変わってくるわけでございます。「馬鹿なことは我々も言ってはおれんな」という機運になった時に、私は、何でも行政まかせの風潮で今日まで来た流れを、行政がやるべきものと、地域の皆さんがやってもらうものを明確に区分いたし宣言しました。

例えば、「〇〇をやってくれ」と、地域の代表者が村議会議員を連れて来るわけでございますが、工事金 200 万円以下位のもの一私も土木に関する資材業もやっておりましたので、だいたい土木のことはわかりますーについては、「この程度は下條村ではやりません」「私の任期のあるうちはしません」「どうか皆さん自分で汗をかいて下さい」「浮いたお金は巡りめぐって必ず皆さんの所に返りますから」と言って、かたくなにお断りいたしました。

田舎には夜暗い道が多く、月夜以外は歩けないような大変陰悪な雰囲気は半年間位続きました。「選挙の時はペコペコ頭を下げておいて、村長になったら、これはやらん、あれはやらんと、とんでもない野郎だ」ということで、相当不評を買いました。

しかし、そのうちに、ある集落が、「村長にいくら言っても方針は変えないだろう、しかれば自分達でやる。ついてはコンクリート 20 立方欲しい」という様なことが一箇所でおきました。そしたら、たちまち堰を切ったように、先ほどのビデオで紹介したような工事が村中で行われるようになったわけでございます。現在では、とんでもない雨や雪の日は除いて、生コン会社が営業している土曜日には、小さい村のどこかで集落の皆さんが当然の様に額に汗ながしてこの事業をやっております。

この建設資材支給事業には二つ大きな利点があります。

一つは、1/5～1/6 の経費でできるということです。費用は材料費だけで、あとは全部(村民の皆さんが)やるわけでございます。重機を使うような場合には、重機の所有者に燃料代のみ出します。これは金銭的にも助かります。

二つ目は、何よりも嬉しいことは、村民の皆さんの意識が全く変わって来たことです、昔は何をするにも行政まかせでございましたけれども、村民の皆さんが知恵を出して自分

で汗をかけば、次の日から集落は目に見えて良くなるわけでございます。その味を覚えてくれたこと、「なんだ、こんなことは簡単だからやりましょう」という気概が村中に生まれてくれたことは、金銭面よりも5倍も6倍も価値があると思います。

また、みんなが汗をかいて仕事やるようになると、何か村でボールを投げると文句ばかり言っていた人も、知らず知らずのうちに地域づくりに熱心な人達の輪の中に引き込まれ、集落で良い指導者として頑張ってくれるようになりました。

6. 役場職員の削減

役場の職員でございますが、最高は59名おりましたけれども、今、37名でやっております。この中に保育士と保健師がおりますので、実際は25名でやっております。総予算に対しての人件費比率は15.3%ということで、ダントツに低い数字です。皆何の抵抗もなく目標に向かって頑張っています。

「何でそんなに減らしたのか」「どのように減らしたのか」とおっしゃる方がおりますが、今まで50%の力しか出してない人に90%の力を出して頂ければ、人が余るということでございます。だから、新規採用はほとんどしておりません。

すると、「新規採用をしないと、その年代の間があくではないか。その時はどうするのか」という質問が来ます。しかし、行政はとんでもなく難しいものではございません。そうした時には、私はそれぞれの年代間の民間人をヘッドハンティングして役場に入れます。その皆さんの新しい力や、意見で組織を更に新生させながらやっていくつもりです。当然のことですが、職員は必要なときに必要なだけ採用するものと割り切っています。先の先の組織体制を整えるため採用するということは、私どものような規模の村では出来ないので、正にスリム化した小さな行政体です。今日までこの方式で全く不便を感じたことはありません。

「行政サービスが落ちるだろう？」という質問もあります。私共の村では全然落ちません。人が多すぎますと、相手の人の職域に手を出してはいかん、足を出してはいかん、あの領分は絶対侵してはいかんということになります。少なくともおけば、職員はほとんどのセクションは経験しておりますので、「俺がやらなければ誰がやる」「あいつが留守ならば、自分がやる」ということになります。役場の職員が真剣にキビキビ対応してくれた場合、役場に何か用件があつてきた人は、「職員が良くがんばっているな」と肌で感じ、心の満足度を得るわけでございます。結果的には1分2分に時間が余分にかかっているかもしれませんが、民間のように本当に誠心誠意対応するというので、村民も充分満足してくれていると思っております。

職員を約22名減らしたことで、予算規模が20億円くらいの小さな村で、1億6,000万円くらいが浮くわけでございます。これらの人件費は、私どもの村としては今まで無駄だっ

たわけで、今振り返る時、まだバブルの余韻のあるうちから心がけて来て良かったかなあ
と思っております。

7. 合併処理浄化槽の導入

4 ページ、最後でございますが、私共の村では、平成 2 年(1990 年)に上水道が完成した後、直ちに下水道の検討に入りました。当時、議長をやっておりました私は、「下水道処理等に関する委員会」の責任者として、1 年間各地を廻り検討しました。そして、公共下水道はやめましょう、農業集落排水はやめましょう、合併処理浄化槽一本に絞りましょう、という答えになりました。当時はまだバブルが華やかな頃でございまして、国や県・コンサルから「何でそんなおもちゃみたいなことをするのか」とさんざん言われました。日本列島中がこのようなムードの時でした。

今、長野県では、下水道マップが出来上がっている地域でも、周辺部はほとんど合併処理浄化槽にと指導しております。厚生省も合併処理浄化槽を積極的に支援してくれています。

私は、その当時、農業集落排水や公共下水道の費用の荒試算をやってもらいました。当時は 45 億から 50 億かかるだろうということでした。皆さんもその道のプロの方がおると思いますが、だいたい下水道事業というのは、50%が補助金で来ます。あとの補助残は、30 年間の元利償還で払うのがスタンダードでございます。すると 30 年間で元利合計 45 億となり、丁度補助金分が食われてしまうわけです。

合併処理浄化槽は、機能的には何の問題ありません。村の負担は表にあるように全体でたったの 2 億 2,444 万円で済みました。加入者には 18 万円、その上を駐車場に使いたい人はプラス 10 万円出して頂きました。仮に公共下水道を 45 億で導入した場合、後年度負担が毎年 1 億 5,000 万円を 30 年間、そして人件費とメンテナンス費がかかるわけですが、合併処理浄化槽は事業費が極めて安く単年度精算のため後年度負担は一銭もございません。それに関わる職員も一人もおられません。これだけで毎年 1 億 5,000 万円が浮くということは、ある意味、歳入と同じでございますので、加入者の負担も軽く、村の財政も助かっております。

合併処理浄化槽は、野菜を洗って砂をじゃーじゃー流し込んだり、天ぷら油を一度に多くぶち込んだりすると、2 年～3 年毎に一度くらい汚泥引き抜きが必要になります。これには、2 万から 3 万円かかります。ところが、管理が良い場合、8 年間、一度も汚泥引き抜きをしたことがないところもございます。正に自己管理、自己責任です。

8. 下條村の財政

3 ページの中程に「村づくりの指標」がございます。財政力指数は 0.221 でして、長野

県でも低い方から数えたほうが早いわけでございます。低い方から3分の1くらいです。経常収支比率は73.9ですので、残りの26.1は次の世代に向けて投資的経費いわゆる設備投資ができる余裕のある金ですよということで、住宅を建てたり、子育て支援等色々やっておるところでございます。

その下に記載の財政の健全度を示す記載制限比率は1.4でして、長野県の中では連続3年間トップの位置にあります。来年度につきましては、1.3という数字が試算されております。この数値には特別気を使っております。

起債残高は35億9,125万円です。これだけ借金があります。しかし、ご承知のように、交付税での補填等、法律で定められた数字を差し引きますと、純借金は9億7,000万円となります。これに対して、基金は27億2,360万円あります。払ってしまえば良いのですが、貸付金利が良いということで、国はなかなか受け取ってくれません。

9. 下條村の出生率等

生涯出生率は1.97人です。先ほどのビデオでスウェーデンの例が紹介されておりましたが、私も6～7年前にスウェーデンに行って参りました。所得税の35%を含め、何のかんのと税として取られる割合は当時57%位でございました。仮に1,000万円の年収のうち、570万円は何らかの形で吸い上げられて、あの福祉国家が出来ているわけです。サッチャー前のイギリスのように、働いて大金を取られるよりも、適当にやって税金が安い方が良いではないかという当時のイギリス病的風潮にもなりそうだという声も聞いて来しました。なかなかバランスは難しいものかなと思っております。

男子平均寿命は、80.1歳。これはたまたまこういうデータがでたのですが、当然県下1位、全国でも6位だそうです。原因はわかっておりません。

10. 人づくり

私は、今日までやってみて、やはり地域づくりというのは、全員でやらなければならないと同時に、基本は人づくりにあるということを感じました。その中で一番影響のあるというのはやはり教育でありまして、私どもは、学校教育にターゲットを絞りまして、今日まで、両校長先生をはじめ、先生方に大変理解協力を頂いております。

昔私達が子供の頃は、就学前の子供は、子供なりに家庭で、又、社会で最低の倫理観を体をもって教えられたものです。そして入学、このパターンでしたが、現代は少子化・核家族化で、家庭でも又一般社会でも子供に対し腫れ物に触れる様な風潮があります。この様な風潮の中で育った子供の入学する比率が多くなり、学校現場も大変です。そして、学校は「聖域」であり、携わる先生方は「聖職」という概念がいまだに残っています。先生方も勉強を教える情熱や技術は最高なれど、やはり転勤が宿命の職のため、一般社会に深

く入り込んで地域社会での真のシガラミ等に接する機会がややもすると希薄になりがちです。子供達が、こうした無菌状態に近いシステムの中を直通し、だんだんと成長し、好むと好まざるとに関わらず、ドロドロした競争社会に突入して行くと、余りのそのギャップが多すぎて、とまどい狼狽し、安易にフリーター又はニート等の選択をすることが多くなるのではと危惧するものです。

そこで、このギャップを埋め実社会にソフトランディングさせるには、当然、家庭・社会全般が学校を「聖域化」するのではなく、先生方と良く連絡を取り合い協力し合い補いあっていかねば、現世に耐える教育の完成は無いと思います。

そこで、私達は学校にお願いし、村を知り村づくりに積極的に参画する機会を出来るだけ作ってもらっています。例えば中学校の生徒会は、「村を考える」をテーマに、村の議会場を使って行われます。生徒達と先生とでテーマを複数挙げ、生徒達は放課後、約1ヶ月かけて現場に足を運んでそのテーマを踏査し、各資料を基に議会の場で村に提案して来ます。実に迫力ある議会になります。議会での村の答弁は当然ですが、数日置いて更に整理した文書にし、例えば、①の案件は1ヶ月以内に必ず要望に応えます、②の案件は県と打合せをするので3ヶ月位かかるが多分大丈夫でしょうという様に具体的に文書で生徒会長宛に返送します。そうすると生徒達は、財政状況厳しい中で、僕達・私達が調べ上げ提案した問題について、責任ある具体的な対応をしてくれたということで、こうした事をくりかえすうちに、村に更に関心をもち、知らず知らずのうちに彼らも村づくりの主役になって参ります。

今一つ例を申し上げますと、当村の中学3年生には村内の企業の訪問研修をしてもらい、生徒さんにその感想文を書いてもらっています。私は、それを読ませてもらうのを楽しみにしています。

ある年3年生の女子生徒の「お父さんごめんなさい」という作文がありました。それによりますと、その女の子は、お父さんは毛虫よりも嫌いと思っていたそうです。お母さんは一日農作業をした後、夕食の支度をしているというのに、お父さんは、仕事から帰ってくるとテレビの前に横になって、なにも手伝おうともしない。本当に駄目おやじだと思っていたそうです。その生徒さんがたまたまお父さんの勤めている企業を視察しました折、愕然としました。お父さんはチームリーダーとして7～8人の部下を従えて、あの重い安全靴を履き工場内で適確なる指示指導をし、走り回っている。あんなことを毎日8時間も9時間もやっていたら、お父さんは死んでしまうだろう、それを全然わからずに毛虫みたいに嫌いと思っていたって誠に申し訳ない、今更言葉に出しては言えないけれど、これからはだんだんと態度で示して良い関係を作り心より詫びたい、と作文には書いてありました。

こうした現実を仮に学校で教えろといっても、先生が黒板に書いても、活字を読んでも、その子は実態を理解できないと思います。その子がこれからだんだん成長し、下條村を出ることも残ることもありましよう。また、新たな世界に当然出て行くことになります。そうした時に、安易な誘惑もあるでしょう。又、厚い壁に突き当たることもあるでしょう。その時に彼女は、「お父さんも、お母さんも、村の皆さんも、そして村をあげて生徒会にも

注目してくれている。私がこんなところで横道にそれたり、少しくらいの壁に突き当たりへこたれていたら、ふるさとに顔向けできないじゃないか」と頑張ってくれると信じております。ふるさと愛を身体に満たした彼女はたくましくすばらしい人生を送ってくれると思います。

また、このようなことは、行政と学校が連絡を密に協力し合っこそ成果が出るものです。先生方も本当に良く理解していただいて、だんだん定着して来ています。これからも村づくりの基本として、このような取り組みを続けてゆきたいと思っております。

11. 終わりに

私どもは常に、村民総参加・町民総参加の村づくり、地域づくりなど日常よく言いますけれど、具体的にどこから踏み込むのかが問題です。当村、まず「隼より始めよ」という言葉通り、職員の意識改革を徹底して行いました。次に村民の皆さんにも知恵と汗をかいってもらって主役になっています。行政と学校・家庭・地域の連帯の中で中学生も村づくりの主役にならんとしています。私は、決して評論家ではありません。私どもの村が今日まで一生懸命取り組んで来たら曲がりなりにもこういう形になって来ました、ということをお話しさせて頂きました。

これからも皆さんからご指導頂きながら、何とか落後しないように皆さんの後をしっかりついてゆきたいと思っております。長野県の下條村というのがあったということだけを頭の中に置いて頂いて、これからも一層のご指導を頂ければ幸いです。

最後にこうして記念すべき会合でおしゃべりをさせて頂く機会を与えて頂いた関係の皆様方に心より御礼申し上げ、私の講演を終わりにさせて頂きたいと思っております。ご静聴ありがとうございました。

下 條 村 の 行 財 政 改 革

★ 下條村というむら

【村の沿革】

- ・ 明治 22 年 4 月 1 日 睦沢村、陽阜村が合併し、下條村となる。
以後 116 年間、単独村として今にいたる。

【位置及び地勢】

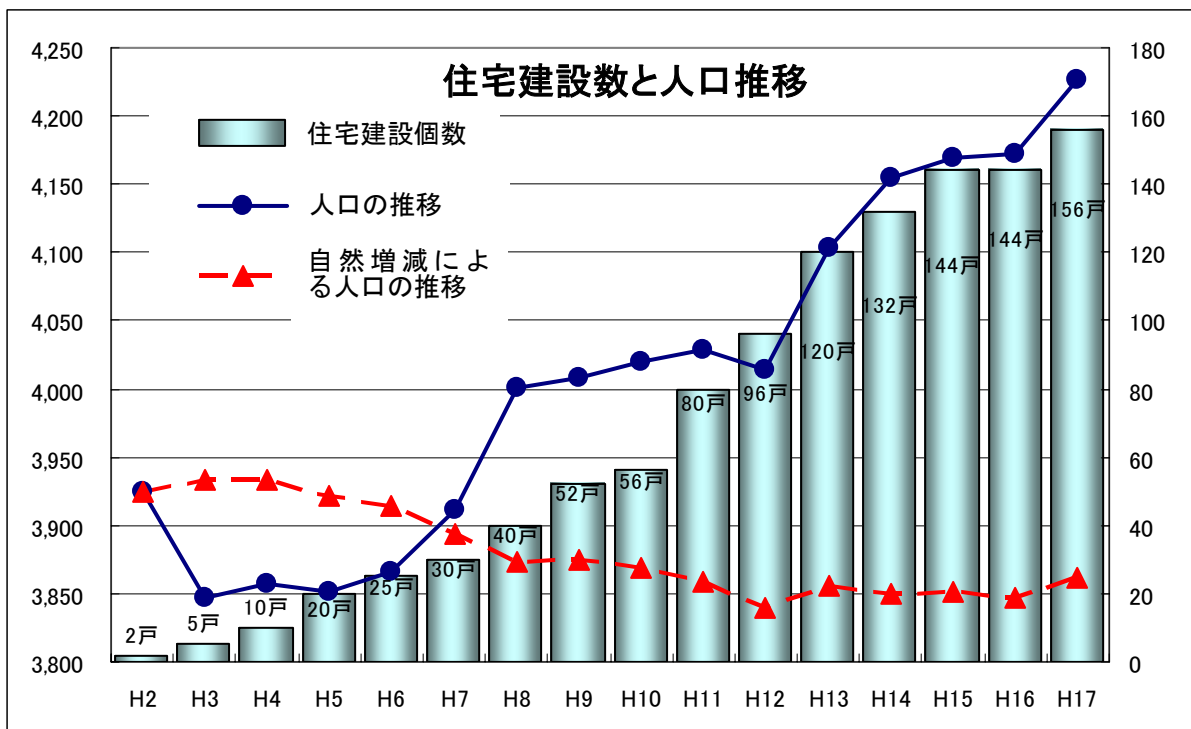
- ・ 長野県の最南端下伊那郡のほぼ中央に位置し、飯田市街や中央道飯田インターから時間距離にして約 20 分の距離にある。
(平成 19 年三遠南信自動車道天竜峡インターが供用開始予定。インターから 7 分)

【面 積】

- ・ 全体面積 37.66 km²
山林面積：26.12 km²(林野率 69.4%)
耕 地： 4.39 km²
宅 地： 1.15 km²

【人口等】

	〔H7 年国調〕	〔H12 年国調〕	〔H16 年 4 月〕	〔H17 年 4 月〕
・ 人 口	4,004 人	4,075 人	4,163 人	4,215 人
・ 世 帯 数	1,028 世帯	1,086 世帯	1,228 世帯	1,260 世帯
・ 高齢化率	25.9%	27.8%	27.8%	28.3%



【産業別就業】 [H12 年国調]

第 1 次産業	第 2 次産業	第 3 次産業	
619 人 (27.0%)	719 人 (34.5%)	884 人 (38.5%)	総計 2,294 人

【年齢 3 区分別人口 (比率)】 [H17 年 4 月現在]

0～14 歳	15～64 歳	65 歳以上
731 人	2,290 人	1,194 人
17.3%	54.3%	28.3%

(県下第 1 位)

【保育園・小学校・中学校の児童生徒数】 [H17 年 4 月現在]

保育園	1 園	1 5 7 人	9 クラス	職員数	1 2 名 (調理婦 2 名含)
小学校	1 校	2 8 0 人	1 1 クラス	職員数	2 1 名 (用務員 1 名含)
中学校	1 校	1 4 7 人	6 クラス	職員数	1 6 名 (用務員 1 名含)

★ 役場組織

首 長 伊藤喜平 任期 平成 20 年 7 月 24 日 (4 期)

助 役 熊谷浩平

収入役 平成 15 年 11 月から設置しない

教育長 幾島 賢

職員数 一般行政職 3 7 名 (H17 年 4 月現在)

(内 保育士 1 0 名 保健師 2 名)

嘱託職員 2 3 名

(内訳：学校給食調理員 3 名、学校公仕 2 名、司書補助 1 名、

保育士 3 名、保育所調理員 2 名、園児バス運転手 1 名

福祉員 2 名、温泉管理人 4 名、公園管理人 2 名、道の駅管理人 1 名

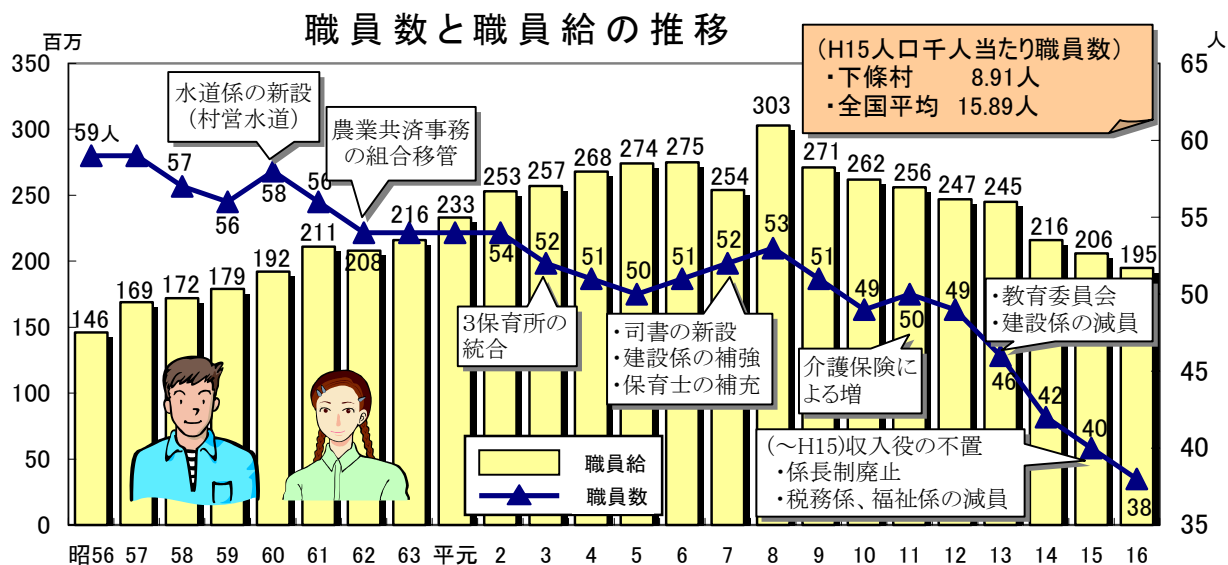
役場公仕 1 名、オフトークアナウンサー 1 名)

人口千人当たり職員数 (平成 1 5 年度財政状況調べより)

下條村 8.9 1 人 類似団体 1 5.8 9 人 (一般職員)

(5 6.0 7 %)

経常収支比率 (7 0.1 %) 人件費比率 (1 5.3 %)



★ 村づくりの指数

【財政指数】(普通会計)

年 度	1 3	1 4	1 5	1 6
財政力指数	0.203	0.210	0.215	0.221
公債費比率(単年度)	10.0	10.2	9.9	10.8
経常収支比率 (%)	69.9	72.1	70.1	73.9
起債制限比率(%)	2.8	1.6	1.7	1.4

(県下第1位)

【起債残高】

H16 年度末 35億9,125万8,000円

うち、交付税措置分を引いた実質支払額9億7,019万9,000円

【基金現在高】一般会計基金分

H16 年度末 27億2,360万円

【生涯出生率】

H10 年～14 年 1.97人(県下第一位)(全国平均1.29人)

H5 年～9 年 1.80人

【男子平均寿命】

80.1歳(県下第1位、全国第6位)

★下條村の上・下水道のとりくみ

1. 上水道事業

- ・ 昭和 60 年から平成 2 年までの 6 年間で完成
- ・ 総事業費 29 億 8,000 万円
- ・ 加入率 99.5%

2. 下水道事業

- ・ 平成元年から検討に入る。
- ・ 当時国県は、公共下水・農集排を積極的に推進

〔検討課題〕

- ・ 公共下水・農集排の建設費は上水道事業費の 1.5 倍はかかるといわれ、43～45 億円位かかると試算
- ・ 管渠の布設では、1m 約 10 万円くらい掛かりイニシャルコストは当然、ランニングコストも未来永劫アップしつづける。
- ・ 自己責任・自己管理意識の高揚を図ることができる。
- ・ 設置者の事情に合わせて設置計画が可能である。 等々

3. 下水道を合併処理浄化槽事業で行うことに決定

総事業費 6 億 3,230 万円 829 基(H2～H15)計画基数比 96%

村負担金 2 億 2,444 万円

県補助金 2 億 393 万円

国補助金 2 億 393 万円

〔全額単年度処理、後年度負担なし〕

【例】7人槽の場合

総費用 691,000 円(定額)

国補助金 137,000 円

県補助金 137,000 円

村負担金 137,000 円

村嵩上額 100,000 円

設置者負担金 180,000 円

4. 村の補助

- ・ 7 条法定水質検査料 12,000 円(設置時 1 回のみ)
- ・ 11 条法定水質検査料 5,000 円(毎年 1 回)
- ・ 上記検査料は、通常年間 400 万円になる。
- ・ この他、平成 16 年度から保守点検料年間 21,000 円のうち半額を補助する。
(よって平成 16 年より村負担約 1,300 万円となる。)

★資材支給事業

1. 目 的

この事業は、地域住民の生活環境を整備するために、住民自らが施工する工事に
関し、村がその資材を支給する。

2. 該当工事

- ・ 村道整備：受益者3名以上の舗装、敷き砂利、側溝布設、横断工、甲蓋、グレー
チング他
- ・ 農道整備：上記に同じ
- ・ 水路整備：受益者3名以上の土側溝の整備、漏水個所の整備、取水施設の整備他

3. 事業費

年間の予算 約2,000万円～3,000万円

建設資材支給事業年別実績表

年	総 額	箇所数	内 訳		
			生コンクリート	砕石等(骨材)	二次製品
H 4	4,948,641		3,656,063	1,151,125	141,453
H 5	11,666,791		7,954,126	583,614	3,129,051
H 6	12,055,066	51	7,213,222	985,298	3,856,546
H 7	16,829,399	65	10,434,804	1,079,028	5,315,567
H 8	15,689,984	100	8,325,339	984,061	6,380,584
H 9	20,483,246	97	14,402,919	1,240,625	4,839,702
H10	31,907,551	114	23,323,124	1,004,276	7,580,151
H11	21,816,439	68	14,146,430	837,845	6,832,164
H12	16,695,638	77	10,231,620	727,962	5,736,056
H13	19,454,849	84	10,979,939	727,637	7,747,273
H14	19,402,386	78	12,972,648	768,811	5,660,927
H15	17,281,113	100	13,211,946	594,458	3,474,709
H16	16,266,159	83	10,392,531	545,423	5,328,205
総計	224,497,262	917	147,244,711	11,230,163	66,022,388

【活性化への取り組み】

平成 元年度	ふるさと体験館「コスモスの湯」建設
平成 2 年度	全村水道完成（過疎地域指定から外れる） 合併浄化槽事業取り組み始める レストハウス「レスト秋桜」建設
平成 3 年度	統合保育所建設 飯田カントリー倶楽部オープン （県内唯一のオールシーズンコース） 墓地公園整備 119 区画
平成 5 年度	リフレッシュパーク下條 極楽パノラマパーク 新井展望公園 小学校体育館 弓道場 建設
平成 6 年度	村立図書館「あしたむらんど下條」建設 （県下第 2 位の利用率 17.0 冊／人） ヤングコミュニハウス建設
平成 7 年度	道の駅「信濃路下條」「そばの城」「遊牧館」建設
平成 8 年度	ふるさと交流センター「うまいもの館」建設
平成 10 年度	刈谷市民休暇村「サンモリーユ下條」オープン 下條親水公園建設
平成 11 年度	インドアスポーツセンター建設 分譲住宅 40 戸売り出し そばの館建設
平成 12 年度	医療福祉保健総合健康センター 「いきいきらんど下條」建設（水中運動が好評） 農産物加工施設建設
平成 14 年度	文化芸能交流センター「コスモホール」建設 （年間利用者 約 15,000 人）
平成 9 年～ 平成 15 年	若者定住村営集合住宅建設 8 棟 100 戸建設 7 棟 × 12 戸 = 84 戸 1 棟 × 16 戸 = 16 戸 一戸建て住宅 56 戸 合計 156 戸
平成 16 年度	幼児から中学生までの医療費無料化

地下資源の枯渇後にも持続的に自立し得る地域づくり

名古屋大学大学院環境学研究科 高野雅夫

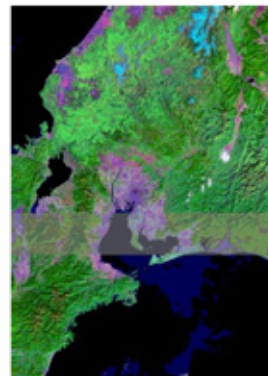
皆さん、こんにちは。今日はお招きいただきまして有難うございます。それから、先ほどの伊藤村長のお話、私も大変感銘を受けました。学者というのは現実にはしか学べないのですが、現実のほうを必ず先に行き、必ず学問が後を行くので、後を追わなければならない。今日のこの会は、まさに伊藤村長の現実の話を私たちが学んでいるということになるかと思います。

これは、人工衛星から見た中部地方の写真です。この中に下條村も入っています。何気なくいつも見ている日本の姿ですが、私たちは、日本には資源が無い、資源が無いと小学生の頃から教えられてきています。

しかし、宇宙から見てこんなに緑にあふれる国はほとんどないですね。水と緑という観点で見ると、これほど資源の豊富な国は世界中にほとんどありません。最も資源に恵まれた国であるとも言えます。せっかくそういう資源がありながら、資源が無いと思い込んで資源を活かしてきていないことが問題であり、逆にそこにいろんな問題を解決していくヒントがあるのではないかと思います。

私は、中山間地の過疎問題や地域経済の衰退問題について、地域の資源をどうやって活かしていくかという観点から学んでいます。ここでは、学んだ成果をお話したいと思います。

地下資源の枯渇後にも持続的に自立し得る地域づくり



高野雅夫
名古屋大学大学院
環境学研究科
持続性学プロジェクト
masao@nagoya-u.jp
だいずせんせいの
持続性学入門
<http://blog.goo.ne.jp/daizusensei/>

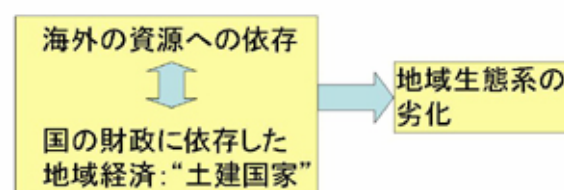
1. 基本的な問題意識

私たちの基本的な問題意識は、今の日本の地域社会は自立もしてないし、持続可能でもないということです。

私たちは、生活に必要な衣食住・エネルギーという資源の相当部分を海外に依存しています。また、地域経済が国の財政に強く依存していて、役場の公共事業で地域経済が回る一方、農林業や地場産業はどん

基本的な問題意識

自立していない持続不可能な日本の地域社会



いつまでも海外の資源に頼れるのか？
いつまでも国の財政に依存できるのか？
生態系を劣化させたままでよいのか？

どん衰退しています。このような2つの依存性がある中で、地域の生態系がどんどん壊れていっている。

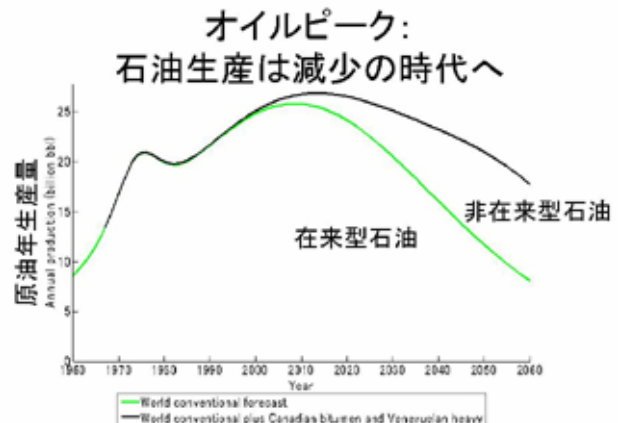
こういう状態でいつまでも海外に頼れるのだろうか。いつまでも国の財政に頼れるのだろうか。地域の生態系をこのままにしておいて良いのだろうか。このようなことが私たちの基本的な問題意識です。

海外の資源の問題に一つだけ触れておきたいと思います。これは、研究室の学生が計算してくれたもので、石油の将来の生産量を示しています。

今まで石油というものは、いくらでも買うことができましたが、今後、石油の生産はピークに達して減少していきます。これをオイルピーク・石油ピークと石油業界では呼んでいて、オイルピークが間近であるというのが1980年台半ば頃からの常識となっています。非在来型石油という質の落

ちる石油が結構あるから大丈夫だという人もいますが、それを追加してもたいしたことありません。オイルピークは、最も厳しい見積もりだと今年、大方の見積もりだと2010年から2015年あたり、最も楽観的な見積もりでも2020年あたりであり、それから先は減少していくというのが石油関係者の常識なわけです。このようにピークに達した後に減少していくというのが、他の資源でもいろいろあります。例えば、一人当たりの穀物生産量もピークに達して減り始めています。

そういう中で、これとよく似た図を最近よく見ます。日本の人口です。日本の人口もほとんど同じ形で減少していきます。これは、ある意味では非常に有利だと私は思います。資源が徐々にきつくなっていく中で、人口が増えている国がやっていくのはとても大変です。



2. 持続可能性とはなにか

そういう中で、地域の持続可能性とは何か少し整理していこうと思います。

持続可能性という言葉は、最近のはやり言葉ですが、人によってはまったく正反対の意味で使っている場合がありますので、私の定義を三つに分けて説明していこうと思います。

1 番目の環境の持続可能性というのは、生態系を活用して維持していく、地下資源を使

地域の持続可能性とはなにか？

1) 環境の持続可能性

生態系を活用・維持、地下資源を使わず、汚染を蓄積しない

2) 経済の持続可能性

安定して暮らしていける生業がなりたつ

3) 社会の持続可能性

コミュニティ維持、おとなから子どもへ生活文化が継承・発展される

わないで汚染を蓄積しないということです。2番目の経済の持続可能性というのは、安定して暮らせていける生業が成り立つということです。3番目の社会の持続可能性というのは、地域で子供が生まれ、育ち、大人になって一人前になっていくといく、そしてコミュニティの中に迎えられてコミュニティを支えていくメンバーになっていく、そういう生活文化の継承と発展がなされるということです。

環境の持続可能性についてもう少し話したいと思います。

私たちは、いろんなモノを使って日々生活しているわけですが、このモノというのは決して無くなりません。一見無くなったように見えるモノも、廃棄物という別の形のモノに名前を変えて、同量が地球上にある。この図は、モノの流れを模式的に表したものです。下に地球と書いた四角があり、上の四角が社会という箱になっていまして、社会は地球からいろいろな資源をもらいます。地下資源というのは地下にタンクがあるようなもので、石油だったら、くみ出して、商品を生産して、消費して、廃棄物が出て、地球に帰っていく。ガソリンを車に入れて走らせればタンクは空っぽになりますけれど、それは排気管から二酸化炭素という形で大気に出ていき、そこに溜まる。プラスチックであれば、埋め立てゴミという形で最終処分場に、つまり、地球に帰ってきます。

このやり方は持続不可能であり、どこかで行き詰まります。一つは地下資源が空っぽになったら打ち止め。これが地下資源の枯渇。もう一つは廃棄物のタンクがいっぱいになって、これ以上入らなくなったら打ち止めです。私が住んでいる名古屋市も、まさに行き詰りかけたところです。最終処分場があと7～8年しかもたないという状況のため、藤間干潟という干潟をつぶして処分場としようとしたところ、反対運動のために処分場ができなかった。そこで、市長はゴミ非常事態宣言を出しまして、ゴミの減少・資源化に取り組むわけですが、「非常事態宣言」に危機感があつたためか、名古屋市の市民はゴミの分別をものすごくするようになりました。

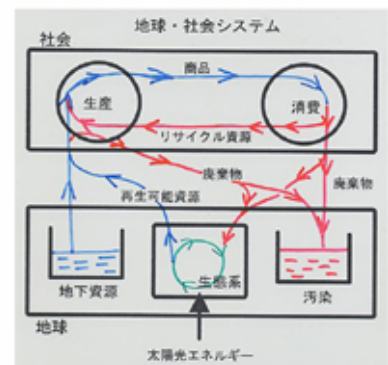
さて、他方で、私たちは生態系からもいろいろな資源を頂いております。たとえば食べ物・木材・水などです。こういうものは、使用後に廃棄物になっても、適切なやりかたで処理すれば、また資源になって生態系が培ってくれます。食べ物を食べますとうんちがでますが、これは肥料になって畑に戻るわけです。ところがこの生態系は現在どんどん壊れております。生態系が壊れてしまうと、生態系から資源がもらえなくなります。

このように、現在、この地下資源・生態系・汚染のそれぞれの部分に持続不可能性があります。

では、持続可能な社会とはどういう社会でしょうか？。

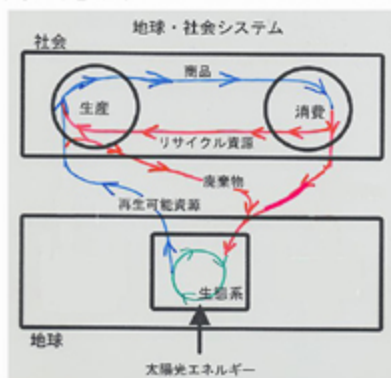
地下資源を使う限り、廃棄物が出ます。ですから、地下資源を使わなければ良いのです。他方、生態系から資源をもらう限りにおいては、適切なやり方をすれば、また廃棄物を

20世紀型社会の持続不可能性

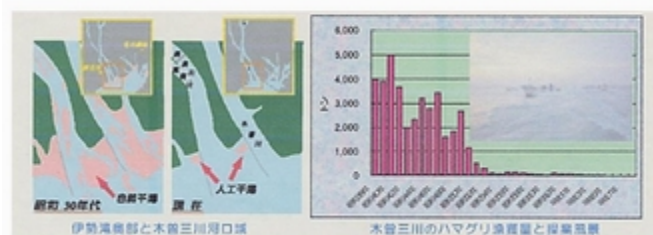


生態系に返すことができます。そして、太陽のエネルギーを使って、生態系がそれを資源化してくれます。こうであれば、いつまでもぐるぐると回っていられるわけです。私たちはこれを「千年持続可能な状態」と呼んでいます。このような生態系は、地域の生態系であるということで、バイオリージョンという風に呼んでいます。

持続可能な社会＝バイオリージョン



利用されず劣化する生態系



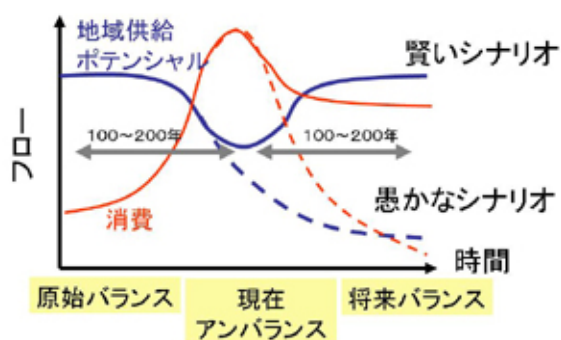
ところが、この生態系も壊れつつあります。

三重県の桑名はハマグリで有名です。「その手は桑名の焼きハマグリ」という言葉があるぐらいですが、現在、桑名のハマグリは絶滅状態です。右側の図は漁獲量ですが、今から15年ぐらい前に激減しまして、それ以降は本当に絶滅状態です。これは、ハマグリの住処である干潟が決定的になくなっていったのと、河口域の水質が非常に悪くなったためです。

これに歴史を入れて考えてみます。

この図の横軸が時間です。消費を示す赤い線が、私たちが使っている食べ物やエネルギーの量です。地域が供給できるポテンシャル、生態系を壊さずにここまで供給できる量が青い線で描いています。昔は、青い線が赤い線の上にあったわけですが、今は消費がどんどん増える一方、生態系が壊れつつありますので、このバランスが逆転しています。このアンバランスの部分を海外に頼っているわけです。

消費と地域供給ポテンシャル でみる持続可能性の評価



今後、どのようになるかということ、何もしないで放っておくと、地域の生態系はこの青い点線のように悪化していきます。この際、石油等が使えなくなったら、消費は赤い点線に沿って変化せざるを得ません。どこかでバランスがとれるわけですが、そのバランスは非常に低いレベルです。これは私たちの愚かなシナリオです。

賢いシナリオというのは、消費を減らしていく一方、生態系を回復させ、高いレベルでバランスを保つということです。こういうシナリオに沿って、戦略を練っていったらどう

かということです。

消費を減らすことができるかということですが、日本は人口が減るわけですから、一人当たりの消費が変わらなければ減るのです。ある意味では放っておけば良いのです。しかし、日本は一人当たりの消費のレベルが非常に高い、高すぎますので、やはり、一人当たりの消費量も無駄を省いていくことが必要です。生活スタイルを変えることによって、そんなに貧乏くさく無く、消費を減らしていくことはいくらでも可能です。こういう努力によって、高いレベルでバランスを保っていくにはどうしたら良いかというのが私たちの研究課題です。

これから農山村の話に入っていきたいと思います。

昔はほとんどの人が農山村に住んでいました。そこでは様々な資源が生産されていました。この図の緑色は食料・エネルギー・原材料—具体的には薪・炭・竹といったもの—を表しています。これらは都市にも供給され、その対価として都市からお金が入り、農山村の経済が回っていました。

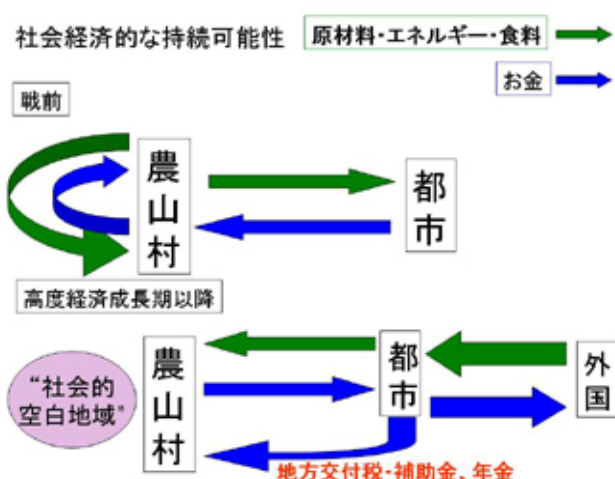
ところが、高度経済成長を経ると、こんどはモノが外国から入ってくるようになり、農山村の人も生活に必要なモノは外国から買うようになりました。これにともない、お金の流れが逆転しまして、農山村から都市にお金が出ていくようになりました。それでは、農山村の人がこのお金をどこから調達しているかというと、税金と年金です。都市の人が払った税金が農山村に地方交付税とか補助金という形で分配されている。あるいは、より高齢化の進んだ農山村が、都市の若い人が支払った年金保険料を年金として受け取っている。このような構図があるわけです。

こういう状況を指して、社会的空白地域という概念が提案されています。つまり、農山村が何も生産しない地域になり、この結果、子どもたちがどんどん出ていって、その世代すらも維持できない、そういう状態を指しています。

それでは、これをどうすればよいかわけと、また、もとのようにすればよいわけですか。そんなことできるわけではないではないか、という話になりますが、まあ、そうではないということを今から話したいと思います。

3. 豊根村の概要

私が、研究活動のフィールドにしている愛知県の豊根村の話をしたしたいと思います。



豊根村概要

面積: 121km²
林野率93%・人工林率は77%
人口: 1433人 (2004年7月)
「木サイクル」事業



切捨て間伐の状況



つみきハウス

愛知県の豊根村は、先ほどの下條村にも近いところですが、愛知県が一番北の端の、長野県と静岡県に接したところにあります。林野率が 93%と、ほとんど平地がありません。人工林率は 77%。ほとんどスギ林です。人口は 1433 人です。

この豊根村では、木サイクル事業という事業を実施しています。左の写真は、スギ林の間伐の状況ですが、伐採するだけで木材を利用しない切捨間伐です。このように捨てられている間伐材をなんとか有効に利用できないかということで、間伐材を運び出し、ブロックを作って、このブロックを積み重ねると家が出来るというのが、右側です。これを「つみきハウス」といいます。この事業を村役場がやっています。

地域経済を見てみます。

まず右側の雇用状況をみると、公務員・建設業・サービス業・林業・農業・製造業・その他という形になっています。この中で、公務員はもちろんそうですし、建設業もほとんどすべて公共事業です。サービス業というのは、村がやっている観光施設等の職員です。民宿もありますが、そのお客さんは、土木事業の労働者が中心です。林業・農業も補助金なしにはやっていけません。したがって、雇用の 7 割ぐらいは、役場から支出されるお金に依存したものになっています。

その財政はといいますと、左側でありまして、村税は全体の 1/3 程度で、残りは国からのお金、そして借金ということになります。山間の地域にしては、村税がかなり多くなっていますが、村税の 2/3 ぐらいはダムの固定資産税です。したがって、ほんとうの住民税は、赤い部分の 1/3 ぐらいしかありません。

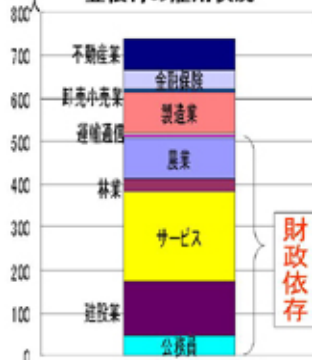
国の財政はどうかというと、下の図の上段の青い線が歳出、赤い線が税収です。税収と歳出の開きは、バブル崩壊以降、ものすごい勢いで開いています。下段が年々の公債発行額です。1998 年・1999 年の公債発行額がものすごいものになっています。その償還年であ

自立していない地域経済

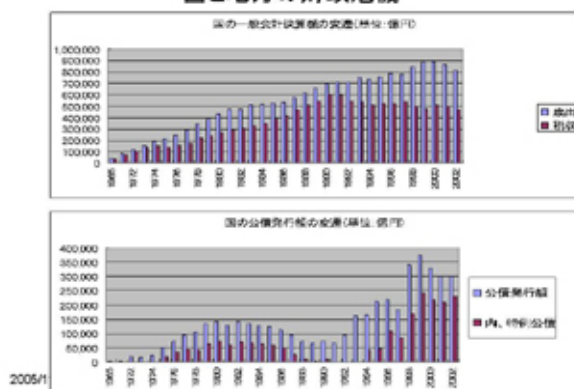
豊根村の歳入(2003年度)
○歳入総額 23億円



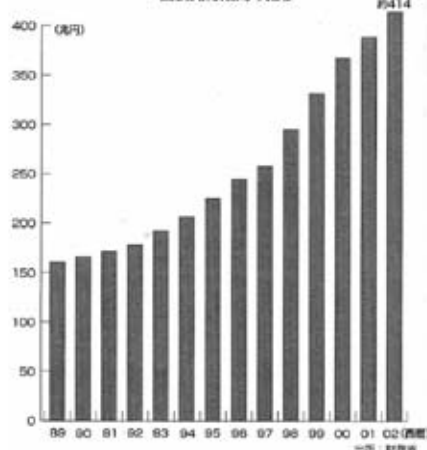
豊根村の雇用状況



国と地方の財政危機



国債発行残高の推移



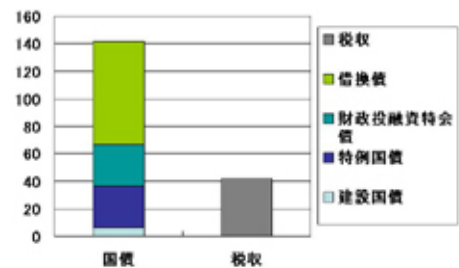
る 2008 年には、かなりやばいことがあるのではないかと、言われています。

その結果、国債発行残高が右肩上がり増加しております。ここ 10 年右肩上がりになったというのは国の借金だけです。

これは昨年度の国の予算の歳入ですが、税収は右側のグラフです。40 兆円しかありません。国債発行額が左側のグラフで、借換え債含めて 140 兆円ということになります。月給 40 万円の家計が毎月 140 万円の借金をするという状況が、いつまでも続くはずはありません。

したがって、今までのように国からお金が下りてくるのを待つというのは、地方にとってはほとんど不可能で期待できないということになります。

平成15年度予算(歳入／兆円)



4. 将来の地域のあり方

人口も減っていく、産業も空洞化する、国の財政も破綻するという中、どのような社会になっていくのかについて語られているのは、可能性 2 のほうです。貧富の格差が増大して、いろいろなセイフティネットが崩壊して、田舎の地域経済が崩壊し、人が都会に出て行き、しかし都会にはもう職が無いので、都会がスラム化していくという暗い未来を指摘する人が多くなっている。それに対して、可能性 1 のように、労働時間が短くなり、自立した地域社会ができ、スローライフ社会ができるのではないかと可能性も指摘されています。

私たちは、可能性 2 にならないように、なんとか可能性 1 になるように考えていかなければと思っています。

人口減少＋産業空洞化＋ 国家財政破綻社会の展望

可能性1) 労働時間の短縮・自立した地域社会 → スローライフ社会

可能性2) 貧富の格差増大・セイフティネット崩壊 → 都市のスラム化
いなかの無人化

さて、田舎の地域社会は、頼れるものは自分だけという自覚に基づき、自分たちで助け合わない限り、可能性 2 に落ちていってしまいます。そこで、これからの地域については、住民が地域をデザインしていかなければならないと思います。

一体どういうことだろうかという、私が思うにはまず、顔の見える範囲で、地域の資源と問題点を調べて把握していくという組織を持つことです。その上で、地域の資源を活用するようなコミュニティビジネスを持ち、その収益を地域の問題の解決に投入する。このためには、リーダーシップの発揮が必要であり、こういう人材を育成する仕組みが必要

となる。また、行政や専門化とのパートナーシップの仕組みを持つということです。

こういう集落というか地域社会があると非常に安心であります。

いつもは抽象的な話で終わってしまうのですが、今日は下條村の非常に具体的な話が出てきましたので、それに学んで考えてみますと、下條村の場合は、飯田市への通勤圏という好立地にあったわけです。その飯田市は、高速道路があるおかげで、セイコーエプソン等のグローバル企業があり、その下請企業なども立地しています。そして飯田市はあまり空洞化していません。下條村は、飯田市の通勤圏である大きな資源を活かすコミュニティビジネスを村役場がやっている。つまり村営住宅です。民間と競争していますが、儲けるためのビジネスではなくて、地域の問題を解決するためのビジネスです。つまり、若い人を増やして、子どもを増やすためのビジネスです。それをやるためのリーダーシップを伊藤村長が発揮されているわけです。伊藤村長を引き継ぐ人材育成を教育の分野で今やろうとしています。絵に描いたようなことを本当に具体的に皆さんと一緒に学ぶことが出来ました。

そういうもとの、「行政の仕事とは一体何だろう？」と市民の一人として私は思います。

戦前から続く国と地方の関係というものは、役所が国から補助金を取ってきて、地域内へ分配するというものでした。「公民館を作ってくれ」と住民が望む場合もありますし、ダムの建設など住民が望まない場合もあります。また、ある人は賛成するが、ある人は反対するという時でも、道路がつくられてしまう場合もあります。今後は、国からお金が下りてこないわけですから、役場には住民が納めるお金しか基本的に無いわけです。公民館を作ってあげるというような事業もできなくなるわけです。道路作ってほしいと言っても出来なくなるわけです。もちろん住民の望まない事業は不可能となるでしょう。

こうなると、役所の人の仕事は、住民が何を望んで何をしたいのかを把握し、合意形成を図るというようなことになると思います。現在は、「道路を作りたい」というようなことを除き、住民の方が「私たちはこうしたい」ということを要望することは非常に稀です。この村をどうしていきたいか、この町をどうしていきたいか、ということを住民が語ることはまず無いわけです。しかし、行為にならない思いとか、日々のモヤモヤ、気持ち

住民による自立した地域のデザイン

- 顔の見える範囲で、地域の資源と問題点を調査し把握することができる組織をもつ
- 地域の資源を活用するコミュニティ・ビジネスをもつ
- その収益を地域の問題の解決のために投入することができる
- リーダーシップの発現と人材育成のしくみを自前でもつ
- 行政や専門家とのパートナーシップのしくみをもつ

行政の「仕事」

- 1940年体制のもとでは・・・
 - * 国から補助金を獲得しそれを地域内へ分配する仕事⇔住民が望むかどうかにかかわらず
- 「構造改革」＝国の財政責任の廃止のもとでは・・・
 - * 地方自治体が行う事業予算は住民税のみ⇒住民の意向に沿わない事業は不可能に
 - * 行政が「やってあげる」事業は不可能⇒住民が主体的に行う公的活動への支援＝「協働」
 - * 住民が何を望み、何をしたいかを把握し、ひきだし、合意を形成すること(ファシリテート、コーディネート)

の中のひっかかりなどを引き出して、合意形成を図り、形にしていけない限り、役所はやる事がなくなってしまうと思います。このようなファシリテーターというか、コーディネーターとしての役目を務めることが役場の職員に必要となると思います。

私たちのような専門家は、こうした場に多少役に立つかもしれないと思っています。地域の将来を考える際には、地域の状況を調べて、地域の姿はどう変わっていくのかというシミュレーションを行っていくことが必要となりますが、専門的な立場からお手伝いができるのではないかと考えています。

その一端をご紹介しますと思います。

5. 豊根村の人口・資源・エネルギーのシミュレーション

豊根村の資源は山林でありまして、これをいかに活用するか、コミュニティビジネスにするかが豊根村にとってのチャンスです。

森林資源を活用するための 自立した持続可能な山間地域のデザイン



高野雅夫、高橋冬樹、
西村信哉、井筒耕平

名古屋大学
大学院環境学研究科
理学部地球惑星科学科

人口のデザイン

-人口1420人、高齢化率42%(2000年)

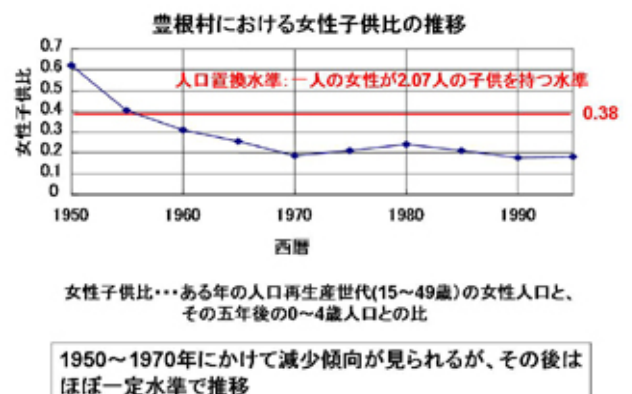
①人口のシミュレーション

豊根村の人口の推移ですが、1950年から2000年にかけて減少しています。1970年に少し増えているのは、ダム建設の労働者のおかげです。典型的な過疎の村です。この人口の減少の要因は何かということを分析しました。



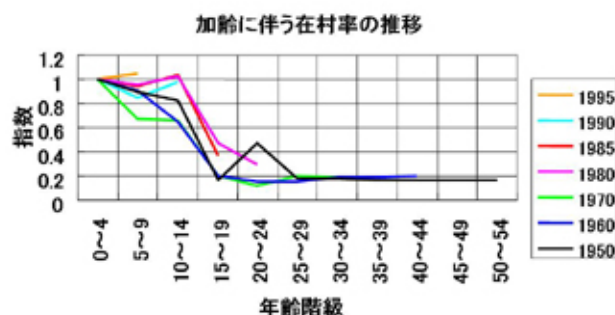
過去の人口推移の要因分析①

まず、出生率ですが、横軸は1950年から2000年まで、縦軸は女性子供比という出生率の係数です。この赤い線が人口置換水準です。豊根村の女性子供比は、1950年頃は人口置換水準を上回っていたのですが、1950年代中盤からずっと下回っています。これが人口が減る一つの要因です。



そしてもう一つの要因が在村率です。この図は、ある年に生まれた方が年齢を経るごとに、どれくらいの割合で豊根村に残っているかを示したものです。この図のとおり、15歳から19歳で在村率が急激に減るのですが、これは、豊根村に高校が無く、高校に進学する際に村外に出てしまうためです。その後の在村率は一定でして、いったん村外に出てしまうと、村に帰ってこないことを示しています。2割ぐらいしか村に残らないので、急激に人口が減り、子どもも少なくなってしまうのです。

過去の人口推移の要因分析②



・豊根村で生まれた人のうち2、3割程度しか帰って来ていない
・近年多少回復傾向にあるが、依然厳しい状況にある

豊根村出身の人に聞いてみますと、都会が好きで村を出て行ったわけではなく、半分ぐらいの方は、できれば村に帰りたいと言っております。しかし、豊根村には職が無いので、村に帰ってくることができず、都会で働いているということです。それで一番悩んでいるのが豊根村出身の高校生・大学生でして、彼らが村に帰れるようにするには、一にも二にも雇用を生み出すしかありません。

昔は、企業を誘致することにより雇用を生み出していました。豊根村も、1970年代に4つの工場を誘致しました。しかし、3つの工場は撤退し、現在も残っているのは1つだけです。この1つも危ないと言われている。

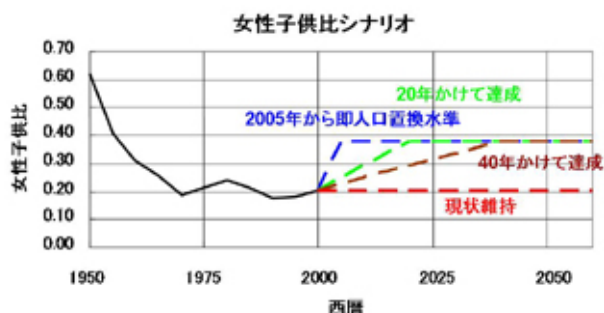
残る手は、自分で事業を起こすということですが、私は、それが非常に大きな可能性があると思っています。

これをどうしていったら良いのかというシナリオをいくつか用意します。

まず、女性子供比について、現状維持のままであるとか、40年かけて置き換え水準を達成するとか、20年かけて達成するとかという数字上のシナリオを考えます。

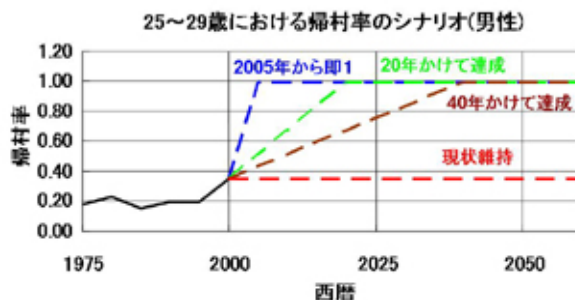
また、25歳から30歳の間に豊根村に帰ってくる人の割合を帰村率と定義しまして、これを現状のままとか、置き換え水準である1を40年かけて達成するとか、20年かけて達

シナリオ要素の設定①



・女性子供比が人口置き換え水準に達するまでの時間によりシナリオを設定

シナリオ要素の設定②



・25～29歳の帰村率が1になるよう20～24歳から25～29歳へのコーホート比を設定
・他の年齢階級間のコーホート比は1980～2000年の平均値を使用

成するとか、即達成するとかの水準を考えます。

これを踏まえて人口の推移を推定します。

現状維持の場合は赤い線です。人口はどんどん減り、2130年には0になります。実際には21世紀の半ばぐらいには100人・200人を切り、集団で移住しよう考えが生まれ、廃村になると思われます。

女性子供比が人口置換水準に達しても帰村率が現状維持の場合、また、帰村率が1に達しても女性子供比が人口置換水準に達しない場合も、やはり人口の減少が続きます。

人口置換水準と帰村率を即達成したのが青い線です。これは実際にはありえないことですが、この場合でも今後50年くらいは人口が減り、その後、人口が落ち着きます。20年で人口置換水準と帰村率を達成した場合は緑の線、40年で達成した場合は赤い線になります。条件の達成が遅れると最終的に落ち着く人数が200人ずつ変わっていきます。

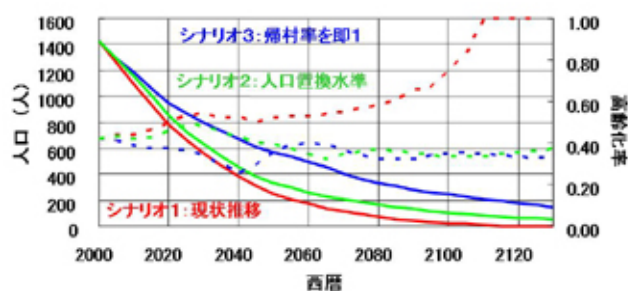
以上を踏まえ、今後20年ぐらいで条件を達成し、人口600人の村として幸せに生きていこうではないかというシナリオを考えていきます(現在の豊根村の人口は1400人)。

②資源のシミュレーション

次は資源です。これはスギの年齢の構成を示しています。年齢に5をかけると年齢になります。一番多いのは8×5の40年生のものです。これは、拡大造林の時に植えられたもので、現在、間伐期を過ぎたものの、収穫期には至っていないという時期にあります。

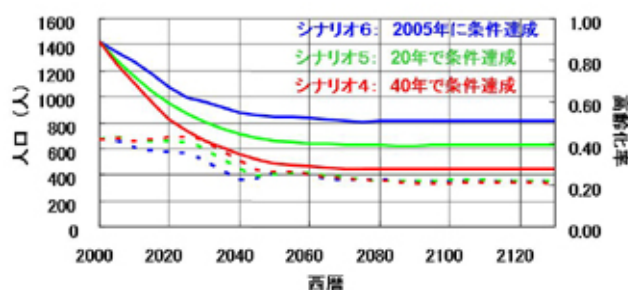
このスギが将来どうなるかをシミュレーションしてみます。横軸が年代、縦軸が伐採量です。標準シナリオでは、拡大造林の頃に植えられたスギが伐採期にさしかかると、大量の材がでてきます。これは豊根村だけでなく、日本全国同じですから、この時期にたくさんの材が出てきても使いようがありませんし、値段もつきません。

人口・高齢化率の推移



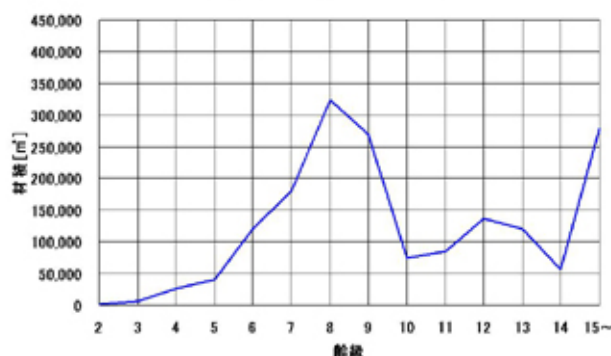
・現状推移では2075年には100人を切り、2130年にゼロ
・女性子供比が人口置換水準であること、帰村率が1であること、どちらが欠けても村はいずれ持続不可能

人口・高齢化率の推移

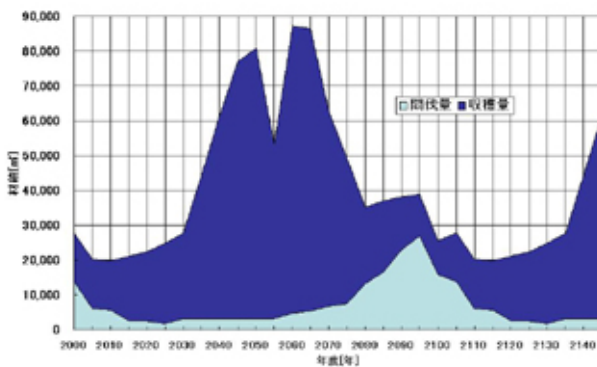


・条件の達成が20年遅れると、定常人口は約200人ずつ減少。
・条件の両方が2005年から直ちに実施されても、2050年までは人口は減り続ける。

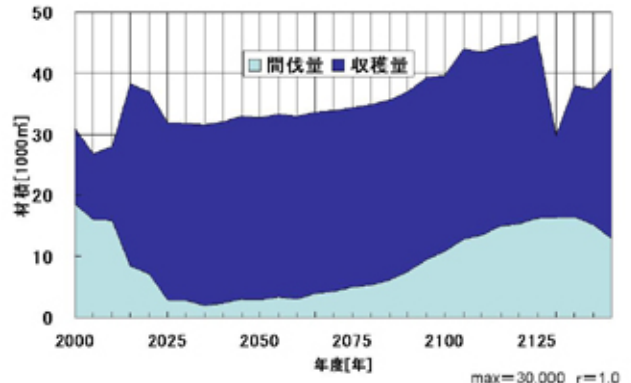
林齢構成(スギ)



伐採量推移(1)標準シナリオ

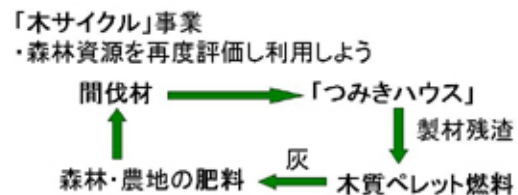


伐採量推移(2)平準化シナリオ



このため、徐々に伐採するような平準化シナリオを検討していきます。この結果、年間3万 m^3 伐採していくと、伐採量が平準化されることがわかりました。逆に年間3万 m^3 は伐採しないと、豊根村の山は死んでしまいます。こういう状況で豊根村の暮らしを考えてゆきます。

豊根村では、伐採された木材を普通の材として利用しているほか、木サイクル事業でつみきハウスに加工したり、木質ペレット燃料を作り出しています。木質ペレット燃料とは、製材の残材を砕いて固めた燃料です。これを村内で使おうというものです。



つみきハウス



間伐材搬出後

③エネルギーのシミュレーション

豊根村のエネルギー需給を見てみます。

電気・LPガス・石油等のエネルギー使用量を調べたところ、全体で年間152テラジュールという量でした。お金にすると4億7400万円になります。豊根村の人たちは毎年5億円ぐらいをエネルギー代として村外に出費しているわけです。

ところが、エネルギーは実は裏山にあるわけです。これを使うことができれば、5億円規模のエネルギー産業が村内につくられることになります。

①現在の豊根村のエネルギー需給

電気(新城営業所/人口比)
・エネルギー量・・・47.2TJ
・売上高・・・262百万円

LPガス(3店舗の合計)
・エネルギー量・・・7.1TJ
・売上高・・・36.3百万円

石油(3店舗の合計)
・エネルギー量・・・98.6TJ
・売上高・・・175.8百万円

トータル
・エネルギー量
152.9TJ
・売上高
474.1百万円

これは、左側がペレット燃料で、右側がペレットストーブです。ストーブの後ろにペレットタンクがついていて、スイッチを入れると自動的に点火して、火力の調整もしてくれます。都会の住宅でも使うことができます。また、ペレット燃料によるボイラーもあります。豊根村には温泉があり、その追い炊きに重油を使っていましたが、この半分をペレットにするということで、ペレットのボイラーが温泉に入りました。

豊根村の人が、将来、全てのエネルギーをペレットで賄うとした場合、年間 1250 トンのペレットが必要になりますが、森林資源としては十分可能な状態にあります。

コストは、ペレット 1kg あたり 20 円ぐらいです。他のエネルギー燃料と比較した場合、LP ガスよりも断然安価です。灯油とはほぼ同じですが、この図の灯油の価格は一昨年のものでして、今年の灯油の値段と比較しますと、ペレットのほうが安くなります。原油価格が上がったおかげで、ペレットは、灯油とも十分に競争可能な燃料になっています。

熱・交通における将来のエネルギー需給をシミュレーションしました。

暖房と給湯という熱エネルギーを見積もったのが赤い線です。人口が減っていくので熱量も減っていきます。

交通のエネルギーが必要です。田舎は自動車でしか移動が出来ませんので、自家用車の燃料が必要になりますが、木材を粉にして発酵させ、アルコール燃料をつくるという技術が発達してきており、アルコールを作って自動車を走らせるということが実用的になってきました。そこで、豊根村の人の交通事情を調査・シミュレーションし、必要となる交通エネルギーを追加したものが青い線です。

木質ペレット燃料

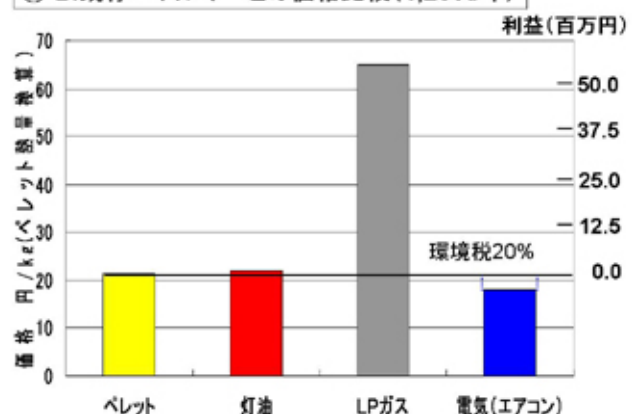
原材料：製材残渣・林地残材など⇒粉砕・圧縮・成型した固形燃料
長さ：10～20mm 直径：6mm
熱量：16MJ/kg(用途：ストーブ・ボイラー)

特徴

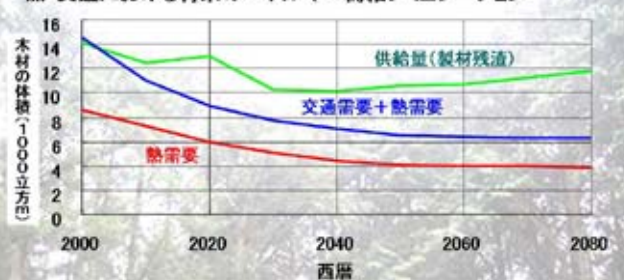
- ①液体のように扱える(タンクローリーで運搬、ストーブ自動供給)
- ②含水率が低く(8～12%)発熱量が安定している
- ③製材クズ、樹冠、樹皮など全ての木質資源を利用できる
- ④燃焼時に有害ガスを発生しない(高温で燃焼・バインダー不要)



②-B.既存エネルギーとの価格比較(1,250t/年)



熱・交通における将来のエネルギー需給シミュレーション



このグラフは、人口シミュレーション、森林資源量のシミュレーションをもとに、熱と交通の部門に必要なエネルギーを得るのにどのくらいの木材が必要かをシミュレーションした結果です。
人口シナリオには、前ページのグラフで黄緑色の線で示したものをしました。
人口の減少に従って交通需要・熱需要ともに減少し、人口が一定になる今世紀後半では熱・交通に必要なエネルギーは十分に供給可能であることが分かりました。
余った分は都市に供給することができます。

緑の線が、先ほどの森林のシミュレーションから計算した供給可能量、製材として出した後の残材です。残材だけでこれだけのエネルギーが得ることができます。

20 世紀の後半を見ますと、供給量の半分程度で、村内の熱と交通のエネルギーを賄うことができることがわかります。これが、地域の資源で地域の問題を解決するという一つの青写真となるわけです。豊根村に住んでいれば、将来、仮に石油が日本に入ってくなくても、エネルギー的には困らないということです。しかも半分ぐらいは余りますので、都市にエネルギーを供給できるということです。

根無し草で家を建てて自分の一代で終わりという暮らしをするのであれば、都市でも良いのですが、腰を据えて住もうと思った場合、豊根村が良いところだということができます。このようなことをこの地域の魅力・資源としてアピールすれば、帰村率を 1 にあげ、出生率を上げることも考えられるのではないかと思います。

6. おわりに

以上、森林資源のある豊根村の例をあげましたが、地域ごとに必ず資源があると思います。私は、それをどう活かしていくかという将来のデザインやシミュレーションをやっておりますので、もし、皆様方が住民と一緒にこういうことをやっていきたいという希望がありましたら、いくらでもお手伝いいたします。声をかけていただければと思います。今日はどうも有難うございました。

都市における水辺の保全・再生と地域活性化

日野市環境共生部緑と清流課 小笠俊樹

皆さん、こんにちは。日野市の小笠と申します。水の郷サミットの主催者として、日野市の取組事例について発表いたします。

1. はじめに

私も日野市は、1995 (H7) 年に水の郷の認定を受けました。「東京で水の郷？」と思われる方も多いかと思いますが、もちろん湧水が豊富な地域や満々とした流れのある水の郷とは比較にはなりません。日野市は、「水辺に生態系を」というスローガンのもと、河川や用水のコンクリート護岸を壊して春の小川のような流れに復元したり、またこうした活動を市民参画のもとに実現してきたことから、水の郷として認定されたと考えております。

2. 日野市の概要

日野市は、東京の都心から西へ 40km ほどのところに位置しております。新選組副長の土方歳三や副長助勤の井上源三郎の生誕の土地でもございまして、まさに新選組のふるさとの町でございます。新選組の隊士たちが剣術の稽古に励んだ道場なども残り、昨年 (2004 年) NHK 大河ドラマで新選組が放映され、日野市としても新選組フェスタというイベントを 1 年間催しました。全国から 30 万人を超える方々に訪れていただき、土方歳三資料館や高幡不動など新選組のゆかりの地も案内させていただきました。



日野の水辺に関わる話でございしますが、地図の上部にブルーで書いてあるとおり、日野市の北側に東京の顔というべき多摩川が流れ、市の中央を多摩川の最大の支流である浅川が西から東へと流れています。

そして、多摩川や浅川によって生み出された沖積低地には、約 450 年前の戦国時代末期の頃から新田開拓のため用水が掘られ始められました。赤いラインで引かれてい



るのが沖積低地を流れる用水で、現在でも 170km 以上にも及んでいます。また、日野市は、かつては東京の穀倉地帯として有名な米どころでございました。

このようなことから、用水と水田の風景が、日野の原風景の一つであったわけです。

3. 水辺の保全・再生の取り組み

①これまでの経緯

日野市では、「水辺に生態系を」というスローガンのもと、水辺の保全活動、コンクリート護岸を壊して素掘りの水路をよみがえらせる等の水辺の復元活動、学校を自然生態系豊かな場所にするビオトープづくり、さらには台地の崖線下や丘陵地の沢筋から湧き出る豊富な湧水の保全活動を実施してきました。

日野市における河川・用水・湧水・学校ビオトープなどの水辺の面積は、市の行政面積の約 15%を占めており、町づくりにおいて、良きも悪しきも水辺に関わりをもつ地域・地形となっています。

かつて、東京のベッドタウンとして住宅開発が進んだ当初は、生活雑排水が用水に垂れ流しになり、悪臭と水質汚濁で用水が悪化していた時代もありました。

このような中、1976(S51)年に、日野市は清流条例を制定し、用水への年間通水を始めました。通常の用水はかんがい期しか水が流れていないのですが、この条例により、日野の用水は冬でも用水に水が流れるようになりました。

また、近年では農業基本条例を制定し、都市の農業を支えるとともに、農地や用水の保全に力を注いでおります。

水辺に生態系を

市民とのパートナーシップ

- ①水辺の保全
- ②水辺の再生・復元
- ③学校ビオトープ
- ④湧水保全



日野市面積の約15%が水域

- 1. 農業用水路 約177km
- 2. 湧水地 約180箇所
- 3. 多摩川、浅川、程久保川、谷地川
- 4. 普通河川
- 5. 学校ビオトープ
- 6. 水田公園

清流条例により用水への年間通水

身近な水辺の保全



日野用水よそう森堀：市民や職員による維持管理

②よそう森堀と水田公園

ここは、日野の最大の用水である日野用水の支流の「よそう森堀」です。春の小川を彷彿させるような素掘りの水路です。

よそう森堀については、約 20 年前、草刈りや掘さらい等の維持管理の手間の軽減を図る目的で、近隣の農家の方々からコンクリート化の要望が出されました。しかし、調査の結果、いろいろな生物が生息していることが明らかとなったことから、地域の小学校や市民団体の方々とともに、この素掘りの用水の保全活動が始まりました。



その後、都市化の波とともに、土地区画整理事業がこの地域で開始されることになりました。そこで、この用水堀を保全するとともに、隣接地を公園に換地することにより、素掘りのよそう森堀の保全と水田を公園化するという計画を進めてまいりました。

図面にありますように、右側の水田の復元と描かれているところが約 1000m²の水田を復元したところです。また、左側の部分約 1500m²には、素掘りの水路と雑木林を復元した公園を計画しました。

日野市では、相続の度ごとに水田が減少しておりますが、このような計画により、用水と水田という日野の原風景が保全されることになりました。

水田公園は、近くの東光寺小学校と、市民大学の農業体験コースに参加する市民によって、稲作が行われています。このように、よそう森公園は、近隣の小学校や住民の環境学習に役立てられています。

将来、仮に近隣の水田が無くなったとしても、この水田は、よそう森公園として公園化されましたので、日野の原風景である用水や水田の風景が将来にわたって残されることになりました。



③向島用水親水路

ここは、浅川から取水をしている向島用水です。写真の上側が上流、下側が下流になります。また、左側が潤徳小学校という小学校です。

左の写真にあるように、かつては用水がコンクリート護岸と石積で覆われておりました。そこで、このコンクリート護岸や石積の部分を壊して、学校の中に水辺の空間を引き入れ

ました。本来の農業用水の機能はそのままに、学校の中に流水のゆるやかな部分をつくりましてーとんぼ池と言いますー、身近な生き物の生息空間を広げた事例でございます。かつて、このコンクリートの用水には5種類の魚類しか生息しておりませんでした。現在は15種類の魚類が確認されるようになっています。

ここ向島用水は、潤徳小学校の中に水辺を引き入れたほか、川の流れは川にまかせろといわんばかりに、護岸を固めず、土の水路を復元する形で設計しました。かつては用水に子どもが立ち入れなかったのですが、これにより、今では春から秋にかけて子ども達がいつでも水路の中に入ることができるようになりました。

また、生態系が復元され、周囲の環境が良くなったおかげで、小魚をついばむカワセミやコサギ類も増え始めております。

向島用水親水路整備前と整備後



親水路で涼をとる少女



木工沈床にくるカワセミ



この場所には戦前までは、2つの水車小屋があったとされています。こうした歴史的な土木遺構を保全していくため、この水車小屋を復元しました。流水によって米の粉がひける構造になっています。

水車小屋の復元



学校の中に水路を引き入れた潤徳小学校では、もちろんこの用水を利用した体験学習、例えば小学校1・2年生の生活科の授業の中でザリガニや小魚を追いかけてたりする授業が行なわれています。また、3・4年生では水質検査などが、5・6年生では近隣の水田で稲づくりの体験学習を行なわれています。

このほか、学校の隣にこうした水辺が引き込まれたことによって、いつでも子どもたちが水辺の中で自然体験をすることができるようになりました。

このような取り組みの結果、2000(H12)年、日本生態系協会主催の第1回全国学校ビオトーポコンクールにおいて、潤徳小学校は計画部門と協力部門の2部門で優秀校に選ばれました。また、国土交通省が進めております水辺の楽校プロジェクトにも2001(H13)年に登録されています。



④浅川・程久保川合流点ワンド

ここは日野の一番の東の端、多摩川・浅川・根川の3川、コンクリート護岸にされている程久保川の合計4川が合流する都内でもめずらしい場所です。程久保川のコンクリート護岸は1960年代・70年代(昭和40年代)に、洪水対策として作られました。また、河川も直線化されました。

このような程久保川を、生態系豊かな昔



の川に戻すため、一級河川である程久保川の護岸に穴を開けて、土の水路やワンドを掘りあげました。

上のきれいな絵は、もともこの事例は市民の方によって発想されもので、これに基づいて生態系豊かなワンドを復元することが導きだされました。合流地点は、国土交通省(当時の建設省)が管理していた場所ですが、学識経験者や市民団体の方々の取り組みより、建設省の職員や日野市の職員が動かされ、一級河川に穴が開けられ、また曲げたりしました。このようなことは、全国でも初めてだそうです。

ワンドの中の状況です。コンクリート護岸であった程久保川から穴を開けて土の水路を導き、固いものから柔らかいものに水が流れていくことにより、本来の川の流れのように瀬と淵の連続的に形成されました。

子供たちは、こうした場所で小魚を取ったりしております。

左下は、小魚が泳いでいる様子です。コンクリートの護岸であった程久保川には4種類の魚類の生息しか確認されませんでした。現在では16種類の魚類が確認されている状況です。



ワンド内の状況

学校ビオトープ

⑤学校ビオトープ

日野市には小学校が19校、中学校が8校あり、現在、1学校1ビオトープ目指して自然生態系豊かな学校づくりを行っています。

左側は七生中学校です。自噴井戸があり、1秒間に40リッター、一日に5000トン以上の水が湧き出しています。このビオトープは、自噴井戸の清流を活用したものです。

右側は、これは最近できたばかりのものです。高台にある学校なので、水源は水道ですが、自然豊かな水辺の学校ビオトープを作った事例です。

左側は、第二小学校ですが、ここにも自噴井戸があり、この自噴井戸を利用して水辺空間を広げた事例です。日野には22~23種類のトンボの生息が確認されていますが、



七生中学校自噴井戸とビオトープ



第六小学校ビオトープ

第二小学校ビオトープ

自噴井戸を利用しているビオトープ

第三小学校ビオトープ

雨水利用しているビオトープ



その半分以上がこの水辺に生息しております。

右側は、小さな学校ビオトープですが、学校の校舎の屋根設置した雨水タンクに水を貯め、その雨水を利用したのが特徴です。オニヤンマやサナエトンボなど飛来してくるような水辺ビオトープになっています。

このように、河川・用水・湧水だけでなく、学校にも水辺空間を作ることで、日野市の水辺空間を広げております。

⑥滝合小学校の取り組み

ここは滝合小学校です。この学校は浅川に隣接しているため、総合的学習において、浅川での学習プログラムを作ってきました。この写真のとおり、浅川の中に入ったりする他、いかだをつくったり、浅川の粘土を持ってきて土器を焼いたり、野草で野草茶や草木染などの活動をしてきました。

そんな活動をしている中、国土交通省の水辺の楽校プロジェクトへの応募を学校側に投げかけたところ、左下のように、学校の中にワンドを掘って水辺を引き入れるような絵を描いてくれました。このような子供たちの発想が国土交通省の職員を動かしまして、真ん中の写真にあるように、今年の3月、水辺の楽校としてのワンドを浅川に掘りあげることにつながりました。浅川の水位と学校の高低差がかなりあり、学校の中に川の水を導き入れることはできませんでしたが、国土交通省の職員も交えてワンドの開設式を迎えることができました。



⑦湧水の保全

日野の中には、台地の崖線下から湧き出る湧水や多摩丘陵の沢筋から湧き出る湧水が豊富で、しみだし程度のものから、相当の湧水量のあるものまで含めると約 180 箇所の湧水地が確認されています。東京の名湧水 57 選のうち、3 つが日野から選ばれました。

⑧用水守制度

先ほど、清流条例の話をしたしましたが、これは冬場でも用水の水を川から引くというものです。これに伴い、冬場の用水の管理は日野市が行なうことになりました。

春から夏の灌漑期は、農家の用水組合が維持管理をするわけですが、農家の方々の高齢化や後継者不足等により、用水の管理が難しくなってきました。他方、用水は、現在では、



環境面・防災面での役割が大きくなってきており、便益が市民全般に及ぶようになっています。

このような中、将来にわたって用水を保全していくため、日野市では用水守制度を発足しました。これは、一般の市民の方々に用水の関心を持っていただき、用水の保全活動に加わっていただくというものです。現在、用水守として約 37 団体 470 名の方々に登録いただいております。

このように、用水組合、用水守という一般の市民、日野市の 3 者が協力して、貴重な生態系の宿る用水が管理されるようになりました。

⑧観光との連携

最後に、身近な水辺を巡り、日野を歩いて回るような観光資源としての水辺の活用への試みを考えてみたいと思います。

まず 1 番目。日野の用水は徳川期以前に引かれたもので、これにより、水田が開拓され、甲州街道の宿場ができ、宿場町として日野が栄えました。江戸から甲州道中をたどる際、多摩川の渡しを渡り、日野で泊まるという道程であったようです。その後、徳川の末期、新選組の隊士が甲州街道沿いの道場や八坂神社に集うようになりました。

現在でも、甲州街道沿いに多数の史跡が残されています。そこで、日野の用水や史跡を巡り、人が集うしくみを考えていきたいと思います。

それから 2 番目に、日野は今まで紹介したように、河川・用水・湧水等の水辺が豊富にありますので、自然の生き物が宿る湧水や用水を取り込んだ「日野まるごと博物館」ともいえるフィールドミュージアム構想の実現を考えていきたいと思います。

最後に、水辺の楽校や学校ビオトープなどの水辺を、トンボが水辺に卵を産みつけるように巡る「水辺の楽校めぐり」です。

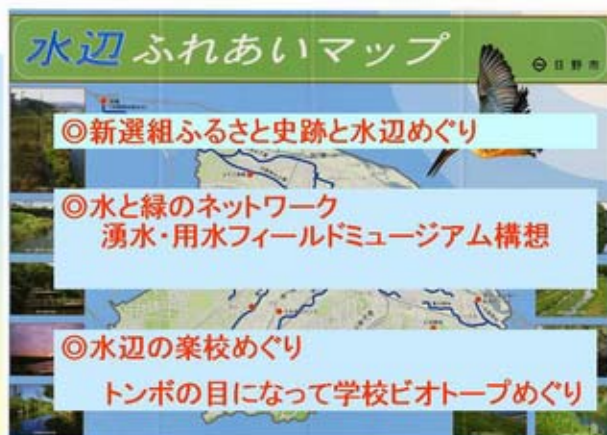
「水の郷」として相応しく、人も宿り、自然の生き物が宿るように、日野宿の再生と共に、生き物の宿場としての再生を考えた観光資源にしていきたいと思っています。

以上、簡単ではございますが、水辺の再生・保全に向けた日野市の取り組みを紹介させていただきました。どうもありがとうございました。

用水守制度



行政や用水組合の活動に限らず、市民との協働によって用水の保全活動を進める



地域資源を活かした活性化法策

東京大学アジア生物資源環境研究センター 堀 繁

1. 水の郷の経緯

こんにちは。今、ご紹介ありましたように、私は水の郷の選定委員を務めさせて頂きました。今回のサミットが 11 回目ですので、11 年前になります。お集まりの皆さんは水の郷についてご存じでしょうけれども、おそらく当時も水の郷に関わった方はあまりいないと思いますので、水の郷がどのようなものであったかについて、最初にお話をさせて頂きます。

当時、環境庁—現在の環境省—が指定した名水百選というものがありました。これは、「名水」ですから、良い水を選ぶということではありましたが、これに欠けている視点は何だかおわかりですか？。水というモノが良い、資源が良い、つまり、神様がくれたものが良いということだと、資源がない所は参考・お手本にできません。水が駄目と言われたら、他の所は頑張りようがありません。名水百選は参考にしようがない。

しかし、日本における水の特徴は、単に良い水があるだけでなく、そこに住んでいる人間がその水をうまく使っているとか、水と人との関わりが非常に上手だということにあります。このような人と水との関わりであれば、先ほどの日野市さんが色々やっておられることなど、参考にできるじゃないですか。もともと古い形で色々地域によって工夫している、そういうものは学んで参考にできます。水の郷百選は、このように日本的である人と水との関わりに焦点をあてて、企画されました。

従って、選定委員は、このような工夫の情報交換の場に水の郷サミットになることを期待していたんですが、この 10 年間、そのようにはなかなかならなかった。これは、私も含め、(水の郷百選について)一生懸命考えた人達が水の郷サミットに全然関わらなかったため、おそらく事務局をやっている人も含め、水の郷って何だったんだろうというのがよくわからなくなってしまったためだと思います。

水の郷の選定からまさに 11 年たち、11 回目の水の郷サミットに呼んで頂いたことは大変光栄であると同時に、水の郷選定委員の使命をちゃんと果たさなければならないと思って、今日、登壇させていただきました。

2. 地域資源と活性化

水の郷というのは、水に限っていますけれど、それを広げれば、地域の資源ということです。地域の資源をうまく生かす。地域を活性化する。最近は時代が変わって、お金をな

るべく使わずに、というテーマも一つ加わりました。

今日の構成は、見て頂ければわかるように、これらの視点が含まれております。金をなるべく使わずに、ということに関しては、下條村長からお話を頂きました。また、地域の資源を活かして、ということに関しては、元々ある水をどうやって市民の目に触れるような、市民が楽しむような、市民が良いと思うような形にするのかという話が日野市からありました。それから、地域の資源を持続的に使っていくのかと言う点について、高野先生からもお話があったわけです。

一つ残っているのが活性化であります。活性化については、日野市さんから、地元に住んでいる人達が参加することによって元気になるという観点からお話がありました。私がこれから話すのは、もう一つの活性化、これこそが多くの市町村にとって非常に重要で関心があることだと思いますけれども、他から人に来てもらってお金をちゃんと落としてもらうにはどうした良いのか、地域の資源をどういう風に使っていけば、よそから人が、お客さんが来て、お金が地域に落ちるのか、こういう話をしたいと思います。

「うちの町には自然が豊かです」「うちの自慢は自然です」「水はまかせて下さい。うちの町は本当に水は豊かです」、という市町村がたくさんあります。ところが、こういう市町村に本当に人がたくさん来て、「良い自然ですね」「この水は良いですねえ」という評価を得て、来訪者がじゃかじゃかお金を落としてくれるかということ、そういう風になっている市町村の方が少ないんじゃないですか？。

つまり、資源がある、自然がある、緑がある、木・森がある、水があるということと、それがお客様の魅力となって、来訪者がたくさん来て、お金が落ちるということとは、実は違います。資源があればイコール魅力だ、ということではありません。

では、どういう状況が来訪者にとって魅力的なのか。ここが大事です。魅力があるところには人が実際に来ていますから。では、単に自然がある、水がある、森がある、何かがある、ということではない魅力とは一体なんなのか、ということを考えていきたいと思います。

3. 見通し

スライドを持ってきましたので、見て頂きながら説明をしたいと思います。

2枚スライドをお見せしますので、どちらの町にお客さんは行ってみたいと思うか考えて、手を挙げてください。これが1枚目(スライド1)です(挙手多数)。これが2枚目(スライド2)です(挙手なし)。

この城(スライド2)は、藤堂高虎の名城中の名城と言われている三重県の津城です。お城という資源は、常識的には良い資源です。そんな良い資源なのに一人も手が上がりませんでした。なぜ、こんなに立派な良いお城があるにも関わらず、魅力的ではないのか。その秘密をお話しましょう。

私たちは、どんなものであっても、見たいものや知りたいもの—良い山、良い森、良い水、良い城—が、他のものに邪魔されずに見えている状況を喜びます。これ(スライド2)

スライド1



スライド2



は、電柱があったり、車が止まっていたり、生け垣があったり、木があったり、ビルがあったりして、せっかくの資源が光り輝いてない状態なんです。

おわかりでしょう。この町(スライド1)では、教会がよく見えています。教会だから良いのではなく、よく見えているということが大事です。頭の中で、さっきのお城をこの教会の位置に持って来てください。この教会をお城の場所に持って行ってください。さてどうでしょう。こっちのお城の方が良い感じになるでしょう？

つまり、資源が「ある」ということと、それが普通のお客さんに、市民に、人間にアピールするということは全く別のことです。「うちは自然が豊かです」「緑がたくさんあります」「水も豊かです」ということと、それがアピールしていることは別のことであることを是非理解してください。「ある」ことだけでは、感動を覚えないし、行ってみたいとは思わない。見たいものが、他のものに邪魔されずによく見えている状態で、我々は、「良い所に来た」「すごい」と思う。何をやったら、豊かな水が資源として魅力を発揮するのか。そこをきちんと学んで、うまく地域の活性化に役立ててもらいたいと思います。

つまり、モノではない。であれば、いろいろ工夫ができるなど、勇気が出るでしょう？。モノだったらどうしようもありません。うちの町には富士山がない。あなたは駄目。摩周湖がない。もう駄目。そうではない。何であっても、自分の所の資源を光り輝かせる。その基本は、他のものに邪魔されずによく見えるようになっているかということです。皆さんのところの水・森などが、そういう形で提供できているかということです。細かくは大事なポイントが多数ありますが、要は、どんな資源があるかではないということです。我々が魅力を感じるのは、どんな資源であっても、それが他のものに邪魔されずによく見えていて、それが光り輝いているように見えている、こういう状態であれば、感動を覚え、行ってみたいと思う、ということです。

もう一つ、来訪者に魅力的だな、と思われる大事なポイントがあります。

4. ホスピタリティ表現

2枚のスライドを見て頂いて、どちらの町に行ってみたいか、手を挙げて頂きたいと思います。これが1枚目(スライド3)です(挙手なし)。これが2枚目(スライド4)です(挙手多数)。

スライド3



スライド4



ゼロ対100ですよ。これは、ということなのか。いったい皆さんは何に反応したのか。皆さんの反応は、当然、1億2000万人全員の反応です。

よそから人に来てもらってお金を落としてもらうための活性化には、何が大事なのか。何がポイントになるのか。一つ目には、資源を良く見せるということでした。もう一つは、「ホスピタリティ表現」です。人は、「あなたが大事ですよ」「私の町ではあなたのことをとても大事に思っていますよ」というような、自分を大事にしてくれる表現を見ることを楽しむ、喜びます。人間を大事にするこの「ホスピタリティ表現」という考え方は、実は、活性化には欠かせない極めて重要な概念であります。それを説明いたします。

これ(スライド3)は、差し障りがあるのでどこかは言いませんが、江戸時代から非常に有名な誰でも知っている温泉町です。しかし、残念ながら、旅館がバタバタつぶれていきます。なぜか。誰も行きたいと思わないからです。こういう町で、旅館が、民間の人達がいくら努力してもだめです。

なぜか。この町で一番問題なのは、公共部分、つまりこの道路(スライド3の道路)だからです。この道路は私たちに何を呼びかけていますか?。「俺、観光客のことなんて、好きなんじゃないんだよ」「俺は車のほうが好きなんだ」「道の真ん中の特等席は車のために空けてあるんだから、お前達観光客は、端っこ歩けよ」「観光客は端の狭い歩道で満足しろ」「歩道には車も止めるけど、お前達はそんなことで文句を言うんじゃないぞ」と、この道は利用者に叫んでいます。つまり、私たち人間よりも自動車を大事にしている道。私たちが大事にしていないそういう道を見て、「良い所に来た」「嬉しい」「行ってみたい」とは我々は絶対思いません。

そういうところで幾ら努力しても、苦戦するのは自明の理です。人間は、私のことを大事にしてくれるものを見るのが嬉しい。活性化しようと思ったら、先程話したとおり、資源を良く見せると同時に、その場所が、実に楽しい、ホスピタリティにあふれている、お客様を迎えるしつらえが実に豊かでレベルが高い、というふうになっていないといけない。

この道(スライド4)は、我々に何と訴えますか?。「私は人間が大好きなんですよ」「ご家族で、手をつないで、ゆっくり真ん中を歩いてください」「あなた達がこの町の主役です」と言ってくれている。つまり、この道は私たちのことを大事にしてくれる。私たち人間は、私のことを大事にしてくれるものを見るのが何より嬉しい。だからこっちに人は集まります。さっきの温泉場は、誰も行かないので、旅館がばったばったつぶれます。

こういうようなことが活性化には欠かせないんです。こういう議論を 10 年間やってくれていたら、(水の郷サミットも)だいぶ違ったのではないのでしょうか？

5. 見通しとホスピタリティ表現の事例

①建物

続いて、2 枚スライドをお見せします。今度は建物です。両方ともかやぶき屋根の公民館です。どちらの建物が魅力的であるか考えてみて下さい。これが 1 枚目(スライド 5)です(挙手多数)。これが 2 枚目(スライド 6)です(挙手なし)。

スライド 5



スライド 6



理由はわかりますか？。これが活性化に必要不可欠なものです。

この建物(スライド 5)は、開け放たれた入口や風に揺れる暖簾が「どうぞお入りください」と我々のことを迎えています。大きな縁台や涼しげな よしずが「さあ、どうぞお座りください」「あがって下さい」と訴えかけています。開かれた障子、揺れる人影、ほの見える明かり、「中は楽しいですよ、さあ、どうぞどうぞ」と全てが言ってくれています。庭に目を移すと、豊かにきちんとしつらえられた花・鉢・木など、全てがあなたのことを迎えています。これがホスピタリティ表現です。

この建物(スライド 6)は、どうですか。何もありません。鉢はありますか？。植物はありますか？。風に揺れる暖簾はありますか？。全部の戸がきっちりと閉ざされている。この建物は、「お前のことなんて知らないよ」「来て欲しくないんだよ」というように、ホスピタリティ表現が何も無い。入り口には、「どうぞご自由にお入りください」と書いてありますが、ホスピタリティ表現がないので、誰も入りません。

ホスピタリティ表現は、地域の資源をいかに使うかということとは直接は関係ありませんが、地域の資源を効果的にする際に、「良いところに来たなあ」と来訪者に満足感を与える際に不可欠なものです。最初に話した「自然がよく見えるなあ」「すごいところに来たなあ」というだけでは実は足りない。それだけではまだお金が落とすところまでいかないです。「もてなされているなあ」「楽しいところに来たなあ」というふうになって初めてお金が落ちる。これが重要なポイントです。

②道と建物

ちよっとくどいんですけど、今度は道と建物の両方をいれた評価です。こういう町であれば、道と沿道の建物の両方で評価します。これが1枚目(スライド7)です(挙手多数)。これが2枚目(スライド8)です(挙手なし)。

スライド7



スライド8



(これまでの比較は)全部0対100でした。評価は安定しています。これはどういうことかということ、その評価に基づいて、どうしたら良いかというノウハウは、全部、ロジックで論理的に組み立てられるということです。それをやれば、1億2000万人が反応するということです。見た方が誰だって嬉しいし、もてなされている方が誰だって嬉しい。よく見えない方が嬉しいって人はいないし、もてなされない方が嬉しいって人はいない。あとは、的確に地域にそういうことを着実に形にして落としていくことが重要です。

こちら(スライド7)がなぜ好まれたか。(こちらの道は)「人間を大事にしますよ」「車じゃないんですよ」「人間の皆さん、どうぞ真ん中をお歩きください」と言っています。沿道の建物に目を移すと、実に豊かな道具立てがたくさんあります。暖簾だとか、縁台だとか、メニューだとかサンプルだとか、看板、いろいろなものがあって、「あなたのことが大事ですよ」「さあさあ、どうぞ寄って行って下さい」というように豊かに言っております。

一方、こちら(スライド8)は、三角屋根の町づくりということで、町づくりでは非常に有名な事例です。三角屋根を付けて、屋並を統一しました一本当に統一しているのかどうか私はわかりませんがー。この運動はものすごく盛り上がったんですが、一気に冷めました。理由は簡単です。商店街なのに人が来ずに、お金が落ちなかった。持ち出しばかりで続く町づくりは絶対ありません。持ち出しではない、お金が必ず儲かるというふうになって、地域づくりとか、地域活性化とか、町づくりっていうのは、初めて有効に機能し、支持し、人づくりにつながっていきます。ここはまさにお金かけて、民間の商店が全部お金を出して、自分の家に何とか三角屋根をつけたんですが、全然人が来なかった。急速に活動はしぼんで、今は誰も何も言いません。

なぜか。もうおわかりでしょう。道を見て下さい。この道は「車の方が大事」「買い物客・観光客もうちに別にいないよ」「車の方が大事だよ」というふうに言っています。それから建物を見て下さい。どこが大事か。屋根なんかで人を惹きつけられるわけがない。三角

屋根と陸屋根のどちらのホスピタリティ表現が強いと思います？。「私のことを大事にしている」というのは屋根とは関係ない。(関係があるのは)入口です。(三角屋根の町には)入口に豊かな装置、花の鉢が一つあるわけでもないし、縁台や暖簾があるわけでもないし、何にもない。このようにぶっきらぼうだと、このお店は「売って欲しかったら入ってこい」。そういうふうに見えているように見えます。そんなところに誰も行きません。

このように非常に明快でして、地域活性化のためには、地域の資源をよく見えるようにすることと同時に、ホスピタリティ表現をちゃんとやること、この二つが欠かせません。

③森林

森林の写真を見てもらいます。今の応用編です。お話した二つのこと、よく見える方が嬉しいということ、人をもてなしている方が嬉しいということを念頭において、2枚のスライドをご覧ください。どちらの森に出かけたいと思うか考えてみて下さい。これが1枚目(スライド9)です(挙手なし)。これが2枚目(スライド10)です(挙手多数)。

スライド9



スライド10



理由を考えてみましょう。どうしてでしょう。

これ(スライド9)は天然林です。「(うちの町には)豊かな森、豊かな自然があります」というのは、こういうのが多いのですが、これは、次(スライド10)に比べて、どうですか？。見通しが悪く、中がどうなっているのか全然わからない。よく見えない。入りにくい。つまり、私のことを誘い込んでいない。このような状態の自然があっても、なかなかそれだけでは、「良い所に来たなあ」とはならないというのが今の反応なんです。

「それは間違っている」「手つかずの自然なのに、どうしてお客さんが来ないんだ」と言ってみても駄目なんです。これが現実です。誰も行ってみたいと思わないんだから仕方がない。もちろん、手つかずの自然をそのまま残すと言うことも非常に重要なことです。それは否定しない。だけど、地域の資源を活性化に使う場合には、こういうことを理解してないなければ駄目ですということです。

これ(スライド10)は、カラマツの人工林です。皆さんが駄目と言った先ほどの天然林に比べ、ずっと見通しが良いでしょう？。人間は、見えるということがすごく好きなんです。どうしてそうなのかっていう話をすると講演が2時間くらいかかるんですが。人が入りやすそうに見える。私のことを誘い込んでいる。こういうのが人間大好きでなんです。

「自然と人工、どちらが良い？」と尋ねたら、1億2000万人間違いなく「自然が良い」と答えるでしょう。しかし自然があるからといって、現実にはそれで本当にお客さんが来てくれるかっていうと、そうではない、ということです。先ほどの自然林に人は来ません。こういうことを理解していないと地域活性化とか町づくりはできません。

スライド 11



スライド 12



これ(スライド 11)は、私が設計した日光国立公園の自然遊歩道です。国立公園にはこの程度の木は五万とある。しかし、森の中で見えない状態では木という資源が生きないから、これをデッキの中に取り込むことによって、独立させて見えるようにしました。「でっかい木があるなあ」となって、初めて、そこある資源が人間にとっての実感になってきます。よく見えるようにしてやるということです。同時に、人を誘い込むようにベンチになっていて(スライド 12)、触れるようになっています。こうすると、私のことを大事にってもらっていて、なおかつ自然がよく見えているというふうになります。

もちろん、こういう工夫は五万とある。それぞれの皆さんの地域において、どうやるかというのは、これはケースバイケースで百の現場があれば、百の回答があるわけですから、「ここでこうだからあなたのところもそうです」とは言えないんですけども、ヒントはここにたくさんあるということです。

④水辺

2枚スライドをお見せします。今度は水です。どちらの水辺に行ってみたいか考えてみて下さい。これが1枚目(スライド 13)です(挙手なし)。これが2枚目(スライド 14)です(挙手多数)。

これ(スライド 13)は自然の池です。もう一つ(スライド 14)は人工のものです。何が問題かわかりますか。これ(スライド 13)は、「近づくなよ。お前のことは大事にしないぞ」「資源に近づいちゃならん」という拒絶の形です。歩けば、池が見にくいのがわかります。

資源が見やすい状態を喜ぶ。なおかつ、私のことを誘い込んで大事にしてくれるのを喜ぶ。この2点です。皆さんがこっち(スライド 14)が良いと言ったのは、この2点だからであって、資源の貴重さには反応していません。

だから、自信を持ってください。富士山がなくても、摩周湖がなくても、うちの町だって幾らでもいろいろできます。資源の質だけでは反応しないということです。

スライド 13



スライド 14



これ(スライド 15)は人工の池塘です。戦後、開拓で無理矢理水田を作って、耕作放棄されて荒れた水田を、町が買い取り、人工的に池を掘りービオトープですねー、その上に人を誘い込む木道を作ったんで、お客さんがたくさん来る。邪魔がなくて(池塘が)見える。人を誘い込むような木道がある。二つが実現している。こういうところに人は来ます。人工の池塘だろうが、人工の川だろうが、人工の森だろうが、関係ありません。

スライド 15



⑤その他

良く見える方が良いという今日の最初の話に関連して、ちょっと面白いお話をさせてください。2枚スライドをお見せしますので、どちらに行ってみたいか考えてみて下さい。これが1枚目(スライド 16)です(挙手なし)。これが2枚目(スライド 17)です(挙手多数)。

スライド 16



スライド 17



0対100です。これ(スライド16)は天橋立です。しかし、誰も行ってみたいと思いませんでした。何が問題か。ここの作り方。資源の側ではなく、人間の側が大事なんです。いくら天橋立といえども、ここの作り方が下手だともう駄目なんです。天橋立を作るのは大変べらぼうなお金がかかるけど、たったここだけの整備です。人間を、来訪者とか居住者・市民を満足させるというのは、別に資源を作ることではないんです。人が来る場所、この場所をどう作るかをどう作るかだけの話です。それだけこんなに違っちゃうんです。これは作り方が下手です。ものすごく下手です。これ(スライド17)は、ドイツです。ものすごくうまいです。

これ(スライド18)は、国立公園の特別保護地区の海蝕岸を見るための四阿(あずまや)です。ところが中に入ると(スライド19)、特別保護地区は見えないで、壁ばかり見えます。下手なんです。これによって、資源が生きずに、死ぬってことです。こうやっておいて、「うちの資源は良いのにどうしてお客さんが来ないんだ」「最近のお客さんは見る目がない」なんて言われる方がおりますが、違います。整備が下手なんです。

スライド 18



スライド 19



これ(スライド20)は、ベルサイユ宮殿です。これが資源を生かす、ということです。手前の芝生の作り方がうまい。つまり、人間の側が大事なんです。そこをやるだけで全然違います。

スライド 20



6. 温泉町の活性化事例

①事例 1

これは、私がここ5年程お手伝いさせて頂いている温泉町です。これがその温泉町の入口のところでは質問します。良いところだなあ、行ってみたいと思う人(挙手ゼロ)。どうも行ってみたいくないなあと思う人(挙手多数)。

皆さんは、自分がそのように反応する理由を覚えましたね。人間は二つのことに反応します。一番目。見たいものが見えているか。温泉町に来た。温泉街、見えているか。あんまり見えていない。温泉。お湯。見えてない。二番目。私のことを大事にするホスピタリティ表現。道は自動車中心。建物に暖簾も縁台も何もない。ぶっきらぼうにポンプの車庫がある。全く人を誘い込んでいない。ホスピタリティ表現がない。こういう温泉場に誰も行きません。

これ(スライド 22)が整備する前、入口から見た温泉街の状態です。Before です。行ってみたいと思う人。いませんね。理由はわかりますか？。一番目。見たいものが見えているか。温泉街の街並みはよく見えていません。二番目。私のことを大事にするホスピタリティ表現。「さあさあ、どうぞおいで下さい」とうものが何にもありません。こんな所へは誰も行きません。これが Before の状態です。

これ(スライド 23)が After です。街並みが見えるようになりました。街並みという資源には手をかけていません。資源をよく見えるようにしただけです。もう一つ大事なのは、「さあ、どうぞここで休みください」。という、この休憩スペースです。ここでやったのは、今日お話した二つです。

スライド 21



スライド 22



スライド 23



同じ場所です。ここにあった共同浴場を移転させて(スライド 24)、その跡地を足湯つきの休憩スペースにしました(スライド 25)。デザインも工夫してありますので、道を通った時に、今まで見えなかった対岸が見えるようになりました。資源があるだけでは駄目なんです。資源をよく見えるようにしてやるとともに、同時にお客様をもてなす、居住者を大事にするというホスピタリティ表現がそこに加わらないと、その資源は生きません。

スライド 24



スライド 25



整備前は、旅館に泊まって旅館の湯船につかれないと、温泉場に来た実感がわかなかった。整備後は、お湯が見えるようになり、「ああ、温泉だ」と思えるようになった。これが資源を生かすということです。資源があるだけでは駄目なんです。よく見えるようにする。同時に人をもてなす。おかげさまで、この温泉場の 13 軒の旅館の年間宿泊客数は 30%増加しました。現在、各旅館は、宿泊を受け付ける電話よりも、「すみません。いっぱいです」と断る電話がはるかに多くなりました。これは、今日お話しした資源を生かす二つのコツをやっただけです。

②事例 2

これもある温泉場です。ここの道がメインストリートだったんです。ここを何とかして欲しいと町長さんに頼まれました。この道を整備するという時に、皆さんだったらどうします？。今日お話ししたとおりですね。

スライド 26



スライド 27



これ(スライド26)で問題なのは何ですか?。人間を大事にするという表現がないんです。温泉場なのに、メインストリートから温泉が全然見えない。だから同じことをやりました。温泉を、お湯を見えるようにして、お客様を大事にするという表現をやりました。

After です(スライド 27)。広い歩道が財産ですので、この歩道を真ん中に持ってきて、そこにもてなしの表現、休憩スペースを作りました。車道—大型バスが通れます—は両側に動かししました。これにより、観光客がこの温泉場にどんどん来るようになって、この間の9月の連休中には、温泉開闢以来初めて駐車違反で切符を切られたと話題になったほどです。これは、資源を生かす、資源を見えるようにすると同時に、人をもてなすことをやったわけです。

現在は、こんな状態です(スライド 28、スライド 29)。ずいぶん変わりました。

スライド 28



スライド 29



最後に、スライドをお見せします。足湯の後ろの建物がちょっと違うので、どちらが良い感じに見えるか、ちょっと考えてみてください。

スライド 30



スライド 31



こちら(スライド 30)の方が良い感じだという人(挙手多数)。こちら(スライド 31)の方が良い感じだという人(挙手なし)。

理由はわかりますか?。ここ(スライド 31 の建物)が壁では仕方がない。人を拒絶しています。ここ(スライド 30)は、お店になっています。「食べて行って下さい」「覗いて行って

下さい」というように、お店は人を誘い込むものです。ここの整備の際、私はこの旅館のご主人に「あんたの所を儲けさせるから、テイクアウトの生ビールとソフトクリームを売ってごらん」と掛け合いました。当初、旅館の主人は半信半疑だったんですが、私から話を聞いて、「儲かるかも知れない」と思ってお店をやりました。今や、この旅館は、旅館としての売り上げよりも、ビールとアイスクリームの売り上げの方が多いとのことなのです。

これが活性化ということです。ビジネスチャンスを作るだけでなく、そのビジネスチャンスをしっかりとビジネスにつなげる。実はビジネスをちゃんとやることは、地域を魅力的にするってことなんです。

7. まとめ

資源があるという状態と資源を生かすことは違います。資源を生かすためには、その資源が見えるようにすると同時にお客さんをもてなすことをやる。そうすると、来訪者が来てお金を落とすようなビジネスチャンスの状態が生まれてくるということです。こういうことが大事なことだと思います。

こういうことにあんまり気付いていないし、水の郷サミットがこういう議論、どうして稼いでいこうかという議論を10年間やっていなかったのではないのでしょうか。今回の私の話をヒントにして、是非、色々お考え頂ければ、と思います。

第 11 回全国水の郷サミット パネルディスカッション

ーコスト縮減下における水の郷の地域づくりの展望ー

コーディネーター：堀 繁 東京大学教授

パネリスト：伊藤喜平 下條村長

馬場弘融 日野市長

高野雅夫 名古屋大学助教授

仁井正夫 国土交通省水資源部長

堀教授：

それでは、5 時 50 分までお時間を頂戴しまして、パネルディスカッションを進めたいと思います。テーマは「コスト縮減下における水の郷の地域づくりの展望」です。先ほど講演などを頂いた方もおられますが、自己紹介を兼ねて、先ほどお話されたことのまとめや補足をお話していただき、その後、活発に議論を広げたいと思います。それでは、高野さん・伊藤さん・馬場さん・仁井さんという順番でお願いします。

高野助教授：

名古屋大学の高野と申します。私はもともと人間社会のこととは縁遠い理学の地球科学をやっていたのですが、地球の歴史を調べていくうちに、人間の今の時代というのはとても変な時代であることや、そしてこれからの地球の未来がわれわれの選択によってだいぶ違ってしまうということを知りました。そこで、地球の未来の歴史を研究しようと思い、4 年前に創設された環境学研究科に理学研究科から移りました。

今日のお話は、どれも感銘を受けるお話でありまして、堀先生のお話、資源があっても活かさなきゃだめだよ、活かすポイントに 2 つに尽きるんだよ、というのがとてもわかりやすく、感銘を受けました。生態系の回復に関する日野市の取り組みについてですが、生態系が壊れていく事例は山ほどありますが、回復に向けた組みの事例はなかなかありません。昔の湧き水や用水路を維持・活用して生態系を戻すことに市をあげて取り組んでいることは本当に貴重なものだと思います。魚の種類が倍になったとか、トンボがちゃんと居つくようになったとか、本当の生態系になってきていることが目で見てわかることに感銘を受けました。

それから伊藤村長のお話についてですが、私も、学問上、できることは自分たちでやる、できないことがあったら役所が支援する、それも基礎自治体である市町村が最初で、市町村が対応できない場合に都道府県が対応するという住民自治の補完性の原則については承知しております。伊藤村長は、このような教科書的な勉強ではなく、現実の中からさまざまな取り組みをなさっていると思うのですが、断片的な取り組みはいざしらず、村を挙げて取り組んでいる事例は本当に少ない。非常に先進的な事例であると思います。

全体としては、今、歴史の歯車が大きく変わろうとしている、ある意味では逆転しよう

としていますが、歯車が逆転したすと、今までは一番取り残されていたもの、遅れていると思っていたものが逆に最先端になる。それがまさに下條村であり、日野市であるという風に思いました。以上です。

堀教授：

伊藤村長、お願いします。

伊藤村長：

私、先ほど申しましたように、今日まで貧乏村の村長を 13 年余やっております。就任以来、その私が危機感をいただいていたことは財政問題です。この期に至って、国はもちろん、県、そして末端の行政も、もう騒然たるものでございます。国と地方の借金はまもなく 800 兆円になるということでございます。皆さん、800 兆円という金は、大変な金でございます。700 兆円より 100 兆円多いという程度の認識では困るわけでございまして、1 兆円を 1 億 2500 万人で割りますと、1 人当たり 8,000 円でございます。800 倍して 640 万円、赤ちゃん・じいちゃん・ばあちゃん一人一人がそれだけ借金していることでございます。5 人家族であれば 3,200 万円です。この借金は、いつ、どうやって返せるかということですが、このままの状態では 2010 年代の前半までは借金が増え続けると政府が発表しています。つまり、何とか借金が増えないようにした後、ようやく借金を消していくことになります。誰がどうやって払うかということを実際に考えて頂かないと大変だと思います。

私達は皆、日々一生懸命頑張っていますが、見方を変えれば、次の世代に向けて一生懸命借金を作っているだけとも言えるかと思います。こんなことはいつまでも続くはずはありません。私は常々職員諸君に言っています。高いアンテナを張り巡らせて大局を見てくれ、こうした現実を目をそむけることなく、先送りすることなく、一步を踏み出し、住民に心から信頼されるリーダーとして行動することが、全体の奉仕者である公務員のあり方であると。

堀教授：

ありがとうございました。では、馬場市長お願いいたします。

馬場市長：

日野市の馬場でございます。今日は村長さんはじめ、先生方のお話がとても勉強になりました。ありがとうございました。私ども日野市の例は先ほど担当職員から説明があったとおりです。都会ではありますけれども、一生懸命努力をして、持っている環境、特に水資源を生かして、町づくり、町の活性化に努めよう、こんなふうに努力をしているところです。

先ほど高野先生からお話がありましたが、今、我々は、昭和の世代としてがんばって、良い家にも住め、良いものも食べられ、良い衣装も着られるなど、とてもいい生活ができたと思います。その一方で、まもなく 18・19 歳になろうとしている次の平成世代に、われわれが受け継いだものを受け渡すことができるかを考えると、かなり反省をしなければい

けない。そう考えると、大量生産・大量消費のあり方から一人一人が抜け出して、生活そのものから変えていかなければいけないかなと感じています。

私ども日野市は近隣と比べて町づくりが遅れているというようなことを随分言われていたのですが、おかげで良い環境が残ったというメリットがあります。近代文明への悪さへの反省を踏まえてですね、これからは、歩く魅力とか不便さを中心にして、今ある水とか緑の環境を活かす町づくりができないだろうかと思っていますところ。これに、堀先生からお話があったような人を惹きつける仕掛け、行ってみたくなるような仕掛けを加えれば、資源がより活かせるのかなと思います。

こういう思いに至りましたのは、数年前にゴミの大改革をしてゴミの有料化に取り組んだ際に、「がんばってやれよ」と市民の皆さんにから応援して頂いたことや、「我々の生活は行き過ぎているのではないか」という感覚が多くの方にあることを知ったためであります。

そういった意味では、適正生活といいますか、適正消費ということを踏まえてこの問題に取り組んでいくと効果が出てくるのではないかと思っていますところ。基本的には、やや不便かもしれないけれども、ちょっと昔の生活を思い返して町づくりに生かしていく、そんな発想を持ったらどうかということを感じました。

堀教授：

それでは仁井さん。仁井さんは先ほどの講演・事例紹介をやっていないので長めで結構ですので、お話をいただければと思います。

仁井部長：

水資源部長の仁井でございます。昨年(2004年)の7月から今の職に就いております。前任者・前々任者と違っておりますのは、省庁間の交流人事によって現職に異動となったことで、役所用語で言いますと、私の本籍地は環境省でございます。逆に、今の職の前任者が環境省に異動しております。

水に関連しましては、私が役人になってから30年ほどの中で、水道や水環境等の行政にそれなりの時間携わっております。また、廃棄物やリサイクル関係といったことにも携わっております。ですから、バイオマスや合併処理浄化槽についての今日の話につきましては、かつて私が携わっていたことでもあり、今日のお話は非常に刺激的であったと思っております。

4氏の講演・報告を聞いて、いくつかのキーワードが頂けたという気がしております。

まず、「自律」ということ。言葉をやや変えれば、自分の身の丈を考えながら、それなりにマネージしていくということ。それから「持続性」というものをどうやって考えていくのか。やはり、これから人口が増えない地域としては、人や暮らし・経済の持続性を持たないといけない。また、今ある資源をいかに活用していくかについては、実際に適用していくことは簡単ではないような気がします。非常にシンプルな二つの原則を堀先生からお示しいただきました。

今、日野市長から「ちょっと昔の生活を思い返して」といったお話がありましたけれど

も、私も環境省で温暖化の関連でライフスタイルについて考えたことがあります。やはり、ライフスタイルを変えていくというようなことについては、上からの押し付けみたいなものではなくて、新たなライフスタイルに価値観や格好良さみたいなものをどうやって見出していくか、こういうところで新しい視点を作っていくと、社会や地域の持続性が意味を持つようになるのかなと思っておいます。

以上、取りとめのない話ではありますが、非常に刺激を受けた１時からの時間でございました。

堀教授：

どうもありがとうございました。

それでは、これからいくつか論点を立てて議論をしていきたいと思います。今日のサミットの重要なテーマは、「無駄なお金をかけずに」「地域の資源をうまく使って」「活性化しよう」、それもある時だけではなくて、「持続的に活性化しよう」という３点です。お金をかけずに、地域の資源をうまく使って、持続的に活性化しようということです。

伊藤村長の最初の基調講演は、皆さん、大変刺激だったと思います。私も聞きたいことがたくさんありまして、まずは、無駄な金をかけずにというか、コストとか財政の話について聞いてみたいと思います。伊藤村長のお話は多岐にわたっていましたが、お金を極力減らす工夫、特に私が驚いたのは村民が自分たちで道路を作ってしまうことです。馬場市長、下條村さんのお話を聞かれている際に「なるほど」と何度もうなずいておられましたが、下條村で伊藤村長がやられた工夫は普遍的なものなののでしょうか？。あるいは、あれは伊藤さんの個性であって、なかなか難しいことなののでしょうか？。このあたりをお聞かせいただければと思うんですが。

馬場市長：

実は伊藤村長のお話を伺って、ほとんどこれは応用できるという感じで私は聞いておりました。特に職員の意識改革とか、行政と市民の役割分担、あるいは教育の大切さなどは、我が日野市でも対応できると思います。うちの職員も何名かこの会場に来ておまして、すぐ何人かを３ヶ月ぐらい下條村に派遣して、鍛えてもらおうかと思ったくらいであります(笑)。

堀教授：

それはたいへんですね。(笑)

馬場市長：

基本的には村であっても都会の市であってもですね、ほとんどこの意識でやらなければいけないと私は思いました。また、周りの県や都がああだこうだと言っても、リーダーである首長はこれと思ったことを言い続けることがすごく大事だなということも強く感じました。

先ほども申し上げましたが、私どもは数年前にゴミの改革を実施し、市民の皆さんに結

構高い負担を強いました。その際、私どもは、東京都下で日野のゴミの始末が一番悪いという現状を一生懸命説明して、何とかやろうと言いつけたんですね。その結果、皆さんに努力してやって頂いている。今後、住民の皆さんに負担をお願いするという行政のあり方が定着してくるんじゃないかと思っております。

高度経済成長の時代は、住民の皆さんからお願いされたことをすぐやる、今日できなければ明日やるというのが良い首長であったと言われております。けれども、昨今はそうじゃなくて、行政だってこんな大変なんだということをさらけ出して、最後の支えだけは行政がしっかりやるけれども、一緒にやれるものはやってください、費用負担とか労力の負担等についてはできるものは頼みますと首長は言っていくべき時期に来ていると思います。

基本的には、くどいようすけども、伊藤村長さんと同じような認識を更に私は言い続けなければいけないと思っております。それが良い町づくりにつながると思います。

堀教授：

伊藤村長の先ほどの話の中で、4,000人でやりやすかったという話がありました。日野市はものすごく大きいわけですが、その辺、不都合は感じませんか？。

馬場市長：

行政の適正規模は確かにあると思います。ですから、あまりにも極端に大きな自治体へと合併していくのが果たして良いのかどうか私も思います。伊藤村長の下條村は37平方キロメートルでしたか？。私ども日野市の面積は27平方キロメートル。ちょうど三角形をしまして、その真ん中の高台にある役所の屋上から市全体が概ね見渡せるんですよ。ですから、人口は17万人おりますが、これくらいの規模であれば、村長さんが言われたようなことを私ども日野市でも対応できるのではないかと、職員の削減についてもかなりやれるのではないかと、私は自信を持ちました。市内に山奥があったりすると、どうかなということはあると思いますけれども。

堀教授：

ということは、これは事務局にお願いかな。今日の伊藤村長の話は他の市町村でも十分応用可能ということだから、このサミットの結果を何らかの形にまとめて、少なくとも今日来ていただいた35市町村に配布するということをやると、サミットが形骸化しているなどと言われることがなくなっていくのではないかと思います。

では、関連して、仁井さんお願いします。

仁井部長：

今の話に関連しまして、私が水道行政に携わっていた時に簡易水道の黎明期の話を知ることがあります。その頃は、まだホームポンプがなくて、家で水を確保するのは女性・子供の仕事であることが多かった。このため、農村を明るくするといった観点から、簡易水道という手法がそれぞれの集落で非常にはやりました。この時の簡易水道は、役場がパイプなどの資材を供給して、お父ちゃんたちがそのパイプを埋めるという形で整備がなさ

れました。お母ちゃんたちは、水くみの仕事が明日から楽になるんだから、ちゃんと働きに行ってよ、とお父ちゃんに言った。こういうプロセスみたいなものは、きちんと伝えたいエピソードかと思います。

堀教授：

地方の現場を訪れた際、役場の方々に「こういうことをやったらどうか」と話しても、「今、財政が非常に逼迫していて、できない」としばしば言い返されます。実際、お金がないのですが、時としてお金がないことを言い訳に使っているようにも感じられます。伊藤村長、これに対して何かコメントを頂けると皆の刺激になると思うんですが。

伊藤村長：

私は、これからの自治体のキーポイントというのは意識改革であろうと思います。とはいえ、私どもは意識改革したくて意識改革したんじゃなくて、貧乏だったから本気で取り組めたのだと思います。金がある市町村ではなかなか取り組めないと思います。

巷の中小企業・零細企業は、大変な努力をされております。皆さん方も、何のかんの言っても一生懸命がんばっておるんですけども、一生懸命と言っても行政組織の中での一生懸命です。一般社会の不況変革の嵐吹きすさぶ中を頑張るとる中小企業・零細企業の皆さんと比較する機会はなかなかないということでございます。だから、私たちが最高に頑張っておるといっても、神様がもし仮に居って、公平公正な目を見た時に、「本当かな」と言われるのではないかと思います。なぜならば行政には身近な比較対象が少ない、つまり良い意味でのライバルが不足している。ややもすると独占企業体質になりやすく、競争のない所に進歩はないと感じる時が多くあります。

例えば行政の経費というものは積み上げ方式でございます。ある課が本当なら「6.2人」あれば充分の時に「7人」にしとけとか、「3.3人」なら「4.0人」にしろとか、それを積み上げて年間の行政経費がこれだけかかりますというように、いくらでも積み上げることが可能です。身近にライバルが居らんですから。議会だってそんなに詳しくわかる人は少ないと思います、一度実績をつくれれば前例踏襲、来年もこの経費獲得のためにがんばるというようになってしまいます。正にイギリスの行政学者パーキンソンが言っています。“行政組織は仕事の量に関係なく肥大し続ける”と。

民間は違います。例えば、同業のA社とB社があった場合に、一方の会社の経費率が80%であげるとしたら、他方の会社がこれに勝ち残るには、70%にしなければという答えを最初に出します。それから70%の経費で済ますにはどうするかというように、答えから下に割り出します。積み上げて答えを出すのと、答えから下へ落とすのとでは全然違います。これは中小企業の苦しい経験を積んだ者でなければ解らないと思います。

そこで当村では、「まず隗より始めよ」ということで、職員諸君が民間なみに意識改革した上で、常に極限まで努力を重ねた、これ以上はできないよということであれば、あとは地域住民にお願いするしかないわけでございます。このような姿勢であれば4,200人の地域住民は必ず理解してくれると思います。

私どもの村は、おかげ様で行政も住民も意識改革が定着したかなとの手ごたえを感じて

います。えらそうに言うわけではありませんが、地方交付税がピーク時の約 40%減らされても対応可能なゆるぎないスリム化ができておると思っております。

堀教授：

これは、一番最後に話そうかと思っていたのですが、本日、このサミットに聞きに来ている首長さんが少ないと思います。来場されている方の多くは職員の方でしょう。皆さんが「今日は良い話を聞いた、得だった」と思っても、しかし、「これを市長に言ってもわかってもらえないだろうな」とも思われるのではないかと、思うのですよ。トップが理解していないと、下は動けません。やはり、「サミット」と名乗っているのだから、首長さんに対する働きかけをもう少しやって、政治家である首長さんと、実際に汗水たらす職員の方の両方に来て頂いて、今回の講演等を聞いてもらおうと、ずいぶん効果があるのではないかと思います。これは注文です。

さて、「無駄な金をかけずに」というテーマの答えは、非常に簡単にまとめると、「金をかけずに工夫しろ」というように叱咤激励されたように思います。

また、2 番目の「地域の資源をうまく使って」ということに関しては、先ほど高野先生から、自然科学的に非常に論理的な展開で「こういう風に考えていけ」というような話があったのですが、あれを聞いて、なかなか難しいなと思われた方、これは素人にはできないと思われた方がいらっしゃるかと思います。そこで、「そんなことはないよ」というようなコメントを高野先生から頂ければと思います。

高野助教授：

一番わかりやすいのはエネルギーにかかっているお金の話と思います。地域の人々はエネルギーのためにお金を払っていますが、よく考えれば、そのエネルギーは地域にあるのではないかとことです。豊根村の例で言いますと、山の中の村なので昔は電力会社が電気を引いてくれなかった。そこで、豊根村の人がどうしたかというと、お金を出し合って、川に水車を置いて、水力発電をして、電線を引いて、それで初めて電気が灯ったという集落があります。戦後、それらの発電設備が電力会社買い取られたため、地域の人たちが地域内で使っていたお金が、地域の中に落ちずにですね、全部外に出ていくようになってしまいました。これをどうやって止めるか、という問題だと思います。こういう風に考えると、ちょっとわかりやすくなると思います。

貯金の話も同様です。何かビジネスをやろうとしたら必ず資金が要るんですけども、なかなか田舎では資金を出してくれる人がいない。しかし、皆さんは貯金をしています。その貯金は投資に回るべきものなのですが、それは村外に投資されてしまっている。やはり、地元でビジネスを起こしたい、地域の資源を生かしてビジネスを起こしたい、という人に地元の人のお金から資金が回るような、そういう仕組みが作れると良いと思います。

堀教授：

ありがとうございました。

地域の資源を有効に使うのはもちろんですが、資源を増やしていくということについて、

日野市さんがあのように徹底して水辺の整備をやっていることを十分には認識していなかったの、私は驚かされたのですが、合意形成はどうなっているのでしょうか。一箇所だけやるのあれば、さほど難しくないとは思いますが、あれだけ徹底的にやることに對し、市民の人たちはどう思っているのでしょうか。地域の資源を生かしたり、あるいは作ったりというのは、大々的にやると、必ずいろんな意見が出てくると思うんですね。その辺、日野市は皆さん大いにどんどんやれという風なんですか？。

馬場市長：

私どもの日野市は、水と緑のまちというのが基本にあります。

日野に住んでいる人やこれから住む人にアンケートをとりますと、「東京とはいえ、環境が結構良い」「環境が良いから住んだ」「環境が良いから住みたい」という人がいつも非常に多いことがわかります。つまり、良い意味で環境にうるさい多数の市民の方々が、過去ずっと日野の環境行政をリードしてきて、その結果、現在の市役所に環境共生部とか緑と清流課があるわけです。多くの方が、水とか緑、あるいは農業、里山、こういうものはしっかり守りましょうよという声が圧倒的に強い基本となっているのが私どもの特徴かと思います。

このため、区画整理や道路整備でも、水路を埋めちゃえとか、直線の道路で良いじゃないかとかいう風潮も以前はあったのですが、途中で見直しをして、うねる川筋やうねる道路、親しめる水辺空間が区画整理事業の中でだんだん作られるようになってきたということです。あるいは、下水道がなかった時に本当に汚かった水路が、下水道の整備できれいになってきたので、もう一回水路を開けようという声も出てきました。

こういうことですから、合意形成をしなければ水辺の再生などができなかったということではなくて、むしろ市民の声に押されてこういう行政が今継続して成り立っていると思います。近隣に八王子や立川のようなにぎやかな町があるんですけども、そうではない町の顔を作っていこう、新選組などの歴史的な遺産も加えていけば隣の町に負けないおもしろい町ができるぞというようなことは、基本的な認識として市民に概ね了解されていると思っております。

堀教授：

なるほど。僕が古いのかもしれないけれど、私が環境省で最初に仕事を始めた頃は、「環境保全とか自然保全とかというのは、理念はわかるけど現実には厳しいよ」というような話がありました。今や、市民のほうの方がより積極的で、環境保全や自然保全を行政がやらないと何やってんだという話になるようですが、この点、仁井さん、何かコメントはありますか。

仁井部長：

ちょっと個人的な経験かもしれませんが、廃棄物の行政の中でも容器包装リサイクルの立ち上げに携わりました。この中では、市民グループ、つまり、いろいろ批判的に受け止める人や、あるいは非常に協力的にサポートしてくださる人とのコミュニケーションが非

常に楽しくできました。

その後、産業廃棄物の行政に携わりました。こちらは率直に言って、市民の方々との関係が非常にタイトになっております。やはり、産業廃棄物は、そのネーミングだけで蛇蝎のごとく嫌われていて、民間の計画であろうと公的な計画であろうと、最終処分場の計画が持ち上げれば、地域住民の8～9割は圧倒的に反対にまわります。一方で、量の程度は別として、最終処分場というスペースは確保しなきゃいけない。また、法執行の側としては、一定の基準に合致しているものについては、皆様方が反対だということだけで不許可にすることはできません。「税金で生きている役人はこういうことも言わなきゃいけないんだろうなあ」と思いながら仕事をしておりました。

ですから、環境に対する意識は高い部分もあるんですが、やはり、結構きつい部分も飲み込んでいくことが社会全体として必要な部分があります。そこを、喜んでというところまでは難しいでしょうが、「社会全体はそうなんだろうな」というくらいには理解していただくコミュニケーションの力というのが私どもに必要なのだと思います。自治体のサイズが小さければそれなりに集約しやすいことはあるにしても、4,000人いれば4,000人なりの考え方があり、10万人いれば10万人なりの考え方があるので、このような中で多様性をある程度は維持しながら市民の意見の集約を図っていく技術がまさにリーダーに求められるものなんだと思います。

堀教授：

なるほど。さて、先ほど、下條村の伊藤村長の話聞いていて、人を使うのに非常に長けていると思ったのですが、人以外の地域の資源を持続的にうまく使うとか、俺ならこうするといったサジェスチョンを伊藤村長から頂けないかと思うんですけども、何かありませんか？。

高野助教授：

僕も同じ事を聞きたかったんですけども、たとえば、農業とか林業とかどうでしょうか？。

伊藤村長：

私どもの下條村は、特段の産業がないということでございます。農業・サービス業・工業を大体3分の1くらいの比率でやっておると思います。

農業は一時ものすごく衰退しました。従来は、当然市場ルートに乗せて大量生産・大量消費ということでJAならJAだけの流通経路に依存していたわけですけども、最近、人の交流がある程度盛んになってきたことから、安心安全、顔の見える直販体制をとっています。これが農家の皆さんになかなか魅力でございまして、だんだんいい答えが出ていると思います。

もうひとつは、くどいようでございますけれども、私どもは人材だけが資源でございます。本当に、もうどんなものを探し出すより、人材がピッと目覚めて、全員でがんばってくれれば私どもの地域では無限の資源になるということでございます。いくら井戸を掘っ

ても石油は出てきません。熱海ほどではないのですが、温泉は出ますけれども。やはり私も人材資源に頼って、そんな中から生き残っていかなければと思っております。

皆さん方は、「下條村の職員はムチでたたかれて、ビリビリやっとなる」と思われるかもしれませんが、決してそんなことはございません。みんな楽しくやっております。やる気のある人のやる気をなくすのが公務員の組織であり、その人の能力を最大限まで引き出すのが民間の組織といわれております、私は職員とよく相談して、各自各課の限界に近い目標をみんなで検討して設定します。そうして、その目標に真正面よりチャレンジして行って、その目標を達成した時の満足感・充実感なんていうのは、職員諸君が何ものにも変えがたい価値のあるものと頑張っております。

人間誰しも限りある人生です。どうせ一度しかないその人生、感激を感じ、結果として全体の奉仕者として公務員の使命を全うすることが大切であると信じています。

堀教授：

いやあ、すばらしい話です。ありがとうございました。

馬場市長：

農業の話をちょっとさせてください。私が 1997 (H9) 年に日野市長に就任した後、農業基本条例という条例を作りました。

日野市は、昔から、用水がたくさんあって、東京で一番たくさん米を作っていたところなんです。農業でずっとやってきた町だったわけですね。それが、「農地はなくなってもいいんだ」というふうに思われていたことや、「農地は宅地予定地」という認識もあって、いつの間にか相続などで農地がどんどんなくなっていました。

しかし、環境にうるさい住民から、農地守ろうよ、農業守ろうよ、という声が強くなって、それを踏まえて農業基本条例をつくりました。もちろん、農家が 400 軒くらいしかない都会なのに何で農業基本条例なんか作るのかという話もあり、また、はじめのうちは、農家の方のほうが及び腰だった感じがあったんですけども。

農業基本条例を作ったら、結構、農業が元気になりました。新潟県のように広いところで米を作ったり、酪農などすごい牧場を持っているのだけではなく、都会の片隅で野菜を作ったり、ブルーベリー作ったり、大根作ったり、人参作ったりするのも農業なんだと思います。農業があることによって、里山や水路などの良い環境も守れるということもあり、農業をもう一回見直してですね、わが地域の大きな財産である農地をこれ以上なくさないようにしたいと思っております。

農業の話が出ましたので、日野市の状況をお話させていただきました。

堀教授：

ありがとうございます。

水の郷を始めた当初の資源というのは、やはり、他にない貴重な資源というイメージが強かったのですが、その後、議論を深めていく中で、一見するとどこにでもあるような資源であっても、その資源の見方や捉え方、つまり、どういう風に資源を捉えるのかという

点が非常に重要だというように変わってゆきました。

その資源を生かすも殺すも人しだい。こうなると大変ですね。伊藤村長がずっとお話されているように、人間が仕事をするのだから人間を活性化して、意識改革すれば地域づくりはどのようにでもなるんだとしますと、非常に元気が出ているのに資源が無いというようなことは無いわけで、もう一回自分のところにあるものを丁寧に見直していく作業が非常に重要なんだと、こういうことを改めて強く思いました。

活性化には2つの側面があって、ひとつは日野市さんが進めているような、住んでいる人たちが元気になったり、参加する場が増えるという形の活性化です。もう一つが、私が話したことですが、人を呼んでお金を落としてもらうような活性化なのですが、これについていかがでしょうか。地域の活性化について、何か特別にこういう工夫をしたら良いのではというお話はありますでしょうか？。高野先生の先ほどの例の中には、よそから人を呼んでお金を落としてもらうというような視点はありますか？。

高野助教授：

豊根村も、今まで観光客を呼び込むということをかなりやりました。そして、ある意味ではことごとく失敗しました。要は、名古屋からあまりにも遠いため、豊根村に着くまでに田舎がいくらでもあるので、田舎的な価値を売り込もうとしてもなかなか難しい。

今、豊根村の人たちが考えているのは、豊根村を好きになってくれる人とお付き合いをすることです。

私が学生を豊根村に連れて行く際に泊まる「大入の郷」という施設があります。ダムの水源対策の補助金を使って村が建てた施設なんですけど、その管理・運営は、電気代などの負担を含めて、集落の人が全て行っています。そこでは、村の人たちが日常やっていることを体験できるプログラムを用意していて、この前は、スズメバチの巣を探して、その幼虫を食べる「はちぼい」をやりました。これは村の男たちのこの時期の大きな楽しみでして、初心者にはオオスズメバチは危険なので、クロスズメバチの小さな巣でやってくださるんですけども、これを集落の普通のおっちゃんが指導してくれるわけです。このようなことはどんな観光地に行っても体験できない。それに対して僕たちは受講料みたいな形でお金を払う。地味なんですけども、訪問した者も満足し、それを運営している側も小遣い稼ぎ程度にはなる。もう少し稼働率を上げて、儲けが出るようにして、何とか若い人を一人雇いたいと彼らは言っています。

このように、村の価値を単に見せるというだけじゃなくて、一緒に山を歩き、体験をしてもらうという形での交流はいいやり方だと思います。

私が名古屋に帰ってから、「こんなに面白かったよ」と触れ回っていることもあり、「じゃあ、訪問してみよう」という者もいますし、各種の団体が環境教育のプログラムをする際に豊根の施設を使う事例も出てきています。

堀教授：

大事な点を幾つかお話頂きました。事例紹介の中で私も言いましたけれども、自然が豊かとか、大いなる田舎であるというところで止まってしまっただけでは駄目にして、それだけで

は全然売りにならない。日本全国にそのようなものは五万とあるのであって、そこだけのオリジナルなものではない。それだけではなかなか人は来ないので、それぞれの所で工夫しないと難しいということです。本日、会場にいらっしゃっている皆さんのところではいろいろな工夫をされていると思いますが、豊根村のような体験というのも有力な方法と思います。もちろん、地域の資源はそれぞれ違っているので、それぞれ工夫をしないといけないということだと思います。

さて、時間が迫ってきました。今日は、伊藤村長の人材・人づくりの話がインパクトがあり、また、高野さんから、今後の行政はファシリテーター・コーディネーターになっていかないと、不要となってしまう時代がくるという話がありました。そこで、人材と行政について馬場市長から少しお話を聞かせていただいて、また、仁井さんからは地域における行政の役割についてお話し伺いたいと思います。

馬場市長：

私ども日野市の活性化においては、堀先生からお話があったように、住民と一緒にやっていくということについては、伝統的にこれまでやってきています。

ところが、よそからお客様をお呼びして、「おもてなし」をするという面での認識がほとんどありませんでした。多摩動物園や高幡不動などの面白いものが市内にあるにもかかわらず、しかも、お客様に来て頂いているにもかかわらず、そういう方々を町の活性化に結び付けようという発想がまったく無かったんですよね。このような反省から、大河ドラマ「新選組」などに絡めたイベントを実施しました。このイベントの後、たとえば市役所の職員の対応がずいぶん変わったという評価を頂くなど、職員が変わりました。もっともこのイベントに対しては、「行政は市内にいる人のために何かをやればいいのであって、よそから来るお客なんかどうでもいいじゃないか」「そういうものに市長の趣味で金を使うな」等の反発の声が一部の議員からあって、今でも尾をひいておりますが。

このようなことから、おもてなしをする態度を持つ職員を作るという意味では、「行政もこういう言う風にしなければいけない」というような研修を単に行うよりも、何らかのイベントを実施したほうが効果があるのではないかと考えています。このため、これからは、人をお呼びし、気持ちよくお迎えしてお帰り頂くという形の職員の教育もできれば良いと思っています。

堀教授：

では、仁井さんから。

仁井部長：

個々の地域活性化の行政とは離れたところで日々過ごしていますので、一般論になってしまうのですが。

今後の官民の役割分担の話にも拠ると思いますが、世の中の少々の揺れ動きとは関係無しにきちんと持続していくべき社会のインフラとしての行政の役割は確実にあると思います。他方、地域の活性化のような官民の境界領域においては、触媒的な要素として官が先

鞭をつけるという部分があると思います。これは、単にお祭りをするというようなことではなくて、何らかのきっかけを作らなければいけない時に、行政がエンジンのセルモーターになるような意味です。もちろん、行政は実施する期間や範囲の制限を決めるとか、その身の丈というようなものを見極めながらやる必要があると思います。

堀教授：

はい。それでは高野さんと伊藤さんから、言い足りなかった点、あるいはこれだけ強調しておきたい点をお話頂きたいと思います。

高野教授：

人材育成のことなんですけれども、役所に人材を輩出しているのは大学でして、この大学の責任には犯罪的な面があったと思います。

うちの大学には公務員になりたいという学生が結構います。実際、うちの研究学科だと修士の1割ぐらいが公務員になっていきます。「なんで公務員になりたいの」と聞くと、「生活が安定しているから」というのが一番の理由。「社会全体のことが見える」「社会に貢献できる」というのが二番目の理由。とても行政の現場のことはまったく分かっていない。そういうことが分かるような教育をしてこなかったから、それは当たり前ではありますが。

それで僕はまずいと思って、セミナーを始めました。下條村へは行っていませんが、補完性の原則から見て先進的なところ—NPOが多いのですが—にコンタクトをつけて行ってこいと学生に言っています。たとえば、赤字のためにバス路線が無くなった後に、代替となるバスを運行しているNPO—住民の組織ですが—が四日市市にあります。そういう所に学生を行かせてやると、相手の方には大変ご迷惑なんですけども、学生の目の色が変わるわけです。こういうことをやって初めて行政という分野に行く最初の心構えみたいなものができます。このように、大学は、公務員を目指す学生に対して、ちゃんと新しい公務員像を持ってもらえるようにトレーニングをして、送り出さなければいけないと思います。

他方、現職の役所の皆さんについて言えば、これから公務員は変わらなければいけないと言われても、そういう訓練も何もされてないですから出来なくて当たり前なんですね。ですから、下條村の場合はホームセンターという再教育プログラムがあったわけなんですけども、役所にも再教育プログラムのようなものがやっぱり必要だと思います。

そこで、もし可能であれば、地元の大学と行政が協力して、公務員を目指す学生と一緒に職員も学べるようなプログラムが出来たら良いと思っております。

堀教授：

では最後に、伊藤村長お願いいたします。

伊藤村長：

皆さん、激動の時代と言われて久しいわけですが、今は変革の時と言われています。過日、激動と変革の違いについて、ある評論家がテレビで話しておりました。「激動」

というのは、海にたとえると、嵐で海がものすごく荒れるんですけども、嵐が治まると、海には今までいたイワシやカツオがもとの状態に戻るようなことだそうです。「変革」というのは、非常にサラッと聞こえるようですけども、これが曲者でございまして、やはり嵐で海は荒れるそうでございます。しかし、これが治まった時に、それまでいたイワシがサメになったり、海中には何もいなくなったりするような形で、基本的に変わってしまうというのが今の変革の捉え方だそうです。だから恐ろしい、又、以前は、十年一昔と言われていました。今は時には二年一昔であると思うことがいくつも発生しています。最近下火になりましたけど「ホリエモン」。たった 32 歳の青年が、良い悪いは別にしてメディアの牙城であるフジテレビに札束をもって殴りこみをかける件、最近では、楽天もやっています。こんなことがあるなんて、2 年前に皆さんが予測したことは無いと思います。それだけ大きな変化があるわけでございます。十年一昔と二年一昔とでは、5 倍のスピードになったということで、20 キロの車を運転し景色を見ながら目的地に向かって進むのと、100 キロで景色を見ながら目的地に着くくらいの違いがあるわけでございます、大変な時代になったと思っております。

しかしながら、大変だ、弱ったと言っているだけでは解決しません、批判は批判でいいし、理想は理想で高く掲げながら、私どもは、こうした時代の流れの中で現実を直視し、機敏な動作を習得していかなければいけないし、この不確実の時代、その尖兵となるのが地方公務員の皆さんであると思います。地方公務員の皆さんには、磨けばものすごく光る可能性があるわけでございます。今日までのご活躍に敬意を示しつつ更に最前線で一層頑張ってくださいことに期待しています。

堀教授：

二年一昔という話がありました。地域が大きく変わる時代でございます。その時にそれぞれの所でそれぞれの資源をどういう風に活かして地域を運営してくのか。大変難しいのではありませんけれど、非常に重要なテーマであると思います。

これは事務局へのお願いなるかと思いますが、水の郷サミットというのは、大変な時代に、地域が自分たちの資源をどうやって使っていくのかということを考える場なんです。そこが名水 100 選とは違うところです。ですから、みんなが知恵を持ち寄って情報交換したり、あるいは工夫を学ぶ場としてこのサミットをちゃんと活かしていただきたい。首長さんにももっと来てもらいたい。そのことを部長にもお願いして今日のパネルディスカッションを終えたいと思います。

パネラーの皆さん大変どうもありがとうございました。拍手をお願いしてお仕舞いにしたいと思います。ありがとうございました。

閉会あいさつ

国土交通省 水資源部長 仁井正夫

閉会にあたりまして、一言挨拶申し上げます。

今日は長時間にわたりお疲れ様でございました。また、講師の皆様本当に有難うございました。内容のある、かつ、私どもを本当に刺激する内容のお話をいただきまして、ありがとうございました。

先ほどのパネルディスカッションでコーディネーターの堀教授からお話しがありましたように、今日の水の郷サミットの中には、首長の方々にも聞いていただきたい内容が多々あるように思いました。今日の記録をコンパクトにまとめていただき、首長さんのところに届くようにまとめていただければ、今日の意義も更にプラスになるのかと思っております。

今年の水の郷サミットは、皆様方とも相談し、東京で実務的な内容ということで開催しましたが、実務といいながらもトップセミナー的な内容だった感じがします。これからのあり方につきましては、来年以降、皆様方と相談しながら考えていきたいと思っております。

今日、本サミットに先立ちまして日野市さんはじめ関係の皆様、ほんとうにお世話になりました。感謝の言葉をもちまして閉会の挨拶とさせていただきます。

ありがとうございました。

第 11 回全国水の郷サミット報告書(2005 年 10 月)

国土交通省 土地・水資源局 水資源部 水源地域対策課

100-8918 東京都千代田区霞が関 2-1-2

Tel 03-5253-8111(31-323)

Tel 03-5253-8392(直通)

Fax 03-5253-1583

<http://www.mlit.go.jp/tochimizushigen/mizsei/mizusato/index.htm>
